

GIARI

途上国における障害者の人権
～障害を持つ人びとの自立支援を目指して～
**Human Rights of Persons with Disabilities
in Developing Countries
“Towards Self-support of Persons with Disabilities”**

勝間靖/上久保誠人[編]

目次

プログラム.....	2
主催者挨拶.....	3
基調講演.....	7
難民を助ける会の障害者自立支援活動の紹介.....	25
パネルディスカッション.....	29
報告1：アフガニスタンから.....	30
報告2：ミャンマー（ビルマ）から.....	47
報告3：ラオスから.....	59
報告4：ラオスから.....	74
コメンテーター.....	88
質疑応答.....	102
基調講演者・報告者略歴.....	113

途上国における障害者の人権
～障害を持つ人びとの自立支援を目指して～

Human Rights of Persons with Disabilities in Developing Countries
“Towards Self-support of Persons with Disabilities”

2008年6月17日(火) 午後6時～8時30分
早稲田大学小野記念講堂

プログラム

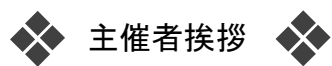
主催：認定NPO法人 難民を助ける会

共催：早稲田大学グローバルCOE プログラム

「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」

協力：アクセント株式会社

◆ 主催者あいさつ	柳瀬 房子
◆ 基調講演	中西 由起子 「権利条約で変わるアジアの障害者」
◆ 難民を助ける会の障害者自立支援活動の紹介：堀江 良彰	
◆ パネルディスカッション	<アフガニスタン> アジズ・アフマッド・アデル <ミャンマー（ビルマ）> ミヤッ モー <ラオス> ケンボン トンシタウン シリソンスック スンダラ コメンテーター：土橋 喜人
◆ 質疑応答	
司会・進行 勝間 靖	



柳瀬 房子

認定 NPO 法人 難民を助ける会理事長

勝間

皆さんこんばんは。今日はこれから「国際人権シンポジウム：途上国における障害者の人権～障害を持つ人びとの自立支援を目指して～」と題したシンポジウムを開催いたします。難民を助ける会が主催です。そして早稲田大学グローバル COE プログラム「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」が共催となっております。また、アクセンチュア株式会社にはいろいろな面でご協力いただいております。

これからシンポジウムを始めさせていただきますが、先程アナウンスメントがありました通り、同時通訳の機材がございます。使い方が分からない、あるいはうまく聞けないという方がいらっしゃいましたら、挙手してください。そうすると、係員の者がお手伝いに伺います。ご遠慮なく手を挙げてください。

私は、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科の勝間靖と申します。共催を代表しまして、少し早稲田大学についてご説明したいと思います。今、早稲田大学ではグローバル COE というプログラムが運営されております。ここでは、3つの分野に焦点をあてています。1つは、アジアにおける政治と安全保障、2つ目がアジアにおける経済、そして3つ目がアジアにおける社会と文化。こういった3つの側面がアジアにおける地域統合、そして域内の協力にどのように関わり合っていくのかが研究テーマです。そして、これらの3つの領域に同時に関わるような環境問題であるとか感染症予防、あるいは人権レジームといった、環境および「人間の安全保障」という領域の研究が進められています。先程、世界的人材育成の拠点と申し上げましたが、私が所属しているのは大学院でございまして、これからアジアでの地域協力を担っていくような人びとを大学院レベルで育成していこうと意気込んでいます。これは日本人だけでなく、アジアの人びとが中心となっていく研究プログラムです。

このグローバル COE のなかで私が担当しているのが、「アジアにおける人権ガバナンス」という研究テーマです。ですから、今日のシンポジウムは「アジアにおける人権ガバナンス」という視点からご協力させていただいております。

それでは主催者を代表いたしまして、「難民を助ける会」の柳瀬房子さんからご挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

柳瀬

皆様こんばんは。「難民を助ける会」の理事長、柳瀬房子でございます。今日はようこそおいでくださいました。ありがとうございます。

「難民を助ける会」は今から 29 年前に設立されました。日本で初めてインドシナ難民を助けることを目的に設立された、政治・宗教・思想的に中立な団体でございます。会長は今年 96 歳になる相馬雪香さん（平成 20 年 11 月 8 日逝去）です。現在も元気で活躍してくださっております。

私もこの会の設立準備の時から関わってきておりますけれども、その最初から決めて

いた了解事が4つございます。1つは、みなさまからいただいた募金を早く使いましょう。それから2つ目は、呼び水になる活動をしましょう。3つ目が、悪平等をやめましょう。あまりにも平等・公正を意識するために、悪平等になってしまうことがある。善き不平等をしましょうと、私達は言っております。そして最後が、声が届かない人の声を聞きましょう、声のあげられない人の声を聞いた活動をしましょうというのが、私達の会で大事にしてきたことでございます。

「難民を助ける会」の活動のなかには、障害者支援、対人地雷対策、そして緊急支援と3つの大きな柱があります。障害者支援は、特に私達が関わっておりますアジア・アフリカの地域の途上国の方々におきましては、声があげられないのが現状でございます。一生懸命声をあげていても届かないのが現実でございます。それを汲み取って、私達の活動を続けてきております。「難民を助ける会」では地雷問題に取り組んでいますが、そのきっかけになったのも、この障害者の方達の声でございます。私共が支援した障害者の方々の多くは、対人地雷の被害者だったのです。

私は一昨日と昨日と、名古屋にこの4人と共に行って参りました。お話を聞いてくださった名古屋の方々、短い時間ではございましたけれども、大変影響を受けて、途上国の障害者の現状に対して共に心を痛めてくださいました。また、今回お呼びした方々には、日本の代表的な障害者の働く施設であります「太陽の家」を見学されて、とても感動されておられました。いつになったら自分たちの国でああいった施設をきちんと運営して、障害者の方々が自立できるか。まだ5年、10年、20年、30年とかかるかもしれませんけれども、という思いで大きな感銘を受けられて東京にお戻りになったようです。

それでは、これから中西先生の講演もございますし、招聘した4人の方々のお話もございます。中西先生は日本における国際障害者支援に対して、大変なご経験と影響力をお持ちです。私もお話を聞かせていただくのを楽しみにしてまいりました。

今回の、このプロジェクトに関しましては早稲田大学グローバルCOEプログラムに共催いただきまして、本当に勝間先生ありがとうございます。こういった素晴らしい会場も提供いただきました。

またこのプログラムに対して、アクセンチュアがスポンサーになってくださいました。皆様にこうやってご紹介できる機会を得ましたことを厚く御礼申し上げます。どうもありがとうございます。それでは、最後までよろしくお願いします。

勝間

「難民を助ける会」の柳瀬さん、どうもありがとうございました。

今、お話しにあった通り、「難民を助ける会」では、対人地雷の犠牲にあった方々、当事者の声を聞いて対人地雷の禁止という問題に取り組まれたということでした。皆さんご存じの通り、対人地雷に関しては「オタワ条約」というものが、NGOなどの主導

によって、またいろいろな国々の協力によって締結されています。今、クラスター爆弾の禁止、制限について、いろいろな議論が国際的に行われていますが、当事者の人びとの声を聞く、という原点について教わった気が致します。そういう意味では今日も、当事者の人びとの声を聞くという姿勢を一番に大事にしたいと思っています。それを、NGO の実践、また大学における研究、そして民間企業の社会貢献ということにつなげていけるのではと思っています。

本日は4人の海外からのゲストをお迎えしております。皆さんお手持ちのプログラムを開いていただきますと、右側に海外ゲストのプロフィールというものがございます。4人の方をここでご紹介したいと思います。

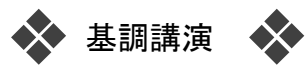
最初に、アジズ・アフマッド・アデルさんでございます。アジズさんはアフガニスタンのカブールのご出身です。理学療法士として公立病院に勤務の後、理学療法専門学校において、教員そして治療指導員として勤務されております。

2 人目、ミャッモーさんです。ミャンマーあるいはビルマのヤンゴンのご出身です。ミャッモーさんは地雷の被害に遭われた方です。美容理容職業訓練校で学ばれた後、現在はチーフ講師として全校の統括をされております。

3 人目をご紹介します。ケンポン・トンシタウォンさん、ラオスのビエンチャンのご出身です。ケンポンさんはポリオ（小児まひ）の後遺症によって小児麻痺の障害をお持ちです。国際 NGO であるハンディキャップ・インターナショナルの職員として勤務されました。また、車いすバスケットにも関わっていらっしゃいます。

4 人目をご紹介します。シリソンスック・スンダラさんです。ビエンチャンのご出身です。ラオスで大学をご卒業後、民間企業、フランス語の通訳、国際 NGO そしてフランス大使館で勤務されました。2007年からは新潟県にあります国際大学のMBAコースで勉強されています。息子さんの脳性まひをきっかけに障害者支援に関心をお持ちになって、脳性まひ児のための施設を設立されています。

この4人の方々の声を聞くということですね。パネル・ディスカッションの中で行っていきたいと思っています。楽しみにしております。



中西 由起子

アジア・ディスアビリティ・インスティテート（ADI）代表

勝間

それでは基調講演に移りたいと思います。基調講演といたしまして、中西由起子さんから「権利条約で変わるアジアの障害者」というお話をいただきます。中西さんのご経歴につきましてはプログラムの下に書いてありますので詳しいご説明は致しませんが、この分野での第一人者の方です。障害者インターナショナルアジア太平洋ブロック事務所、ESCAP 国連アジア太平洋経済社会委員会を経て、1990 年にアジア・ディスアビリティ・インスティテートを設立されております。障害当事者の自助活動や自立生活運動に関わっていらっしゃいます。それでは中西さん、よろしくお願いします。

中西

ご紹介ありがとうございます。中西由起子と申します。基調講演という光栄な場を与えていただけてとても嬉しいです。きっとこれはアジアの障害者にみなさまが関心を寄せてくださっているからではないか、そう思って今日は参加させていただきました。

このシンポジウムの名称から分かるように「途上国に生きる障害者の現状を知っていますか？」という問いかけが皆様になされている訳ですね。多分、普通に考えると途上国に生きる障害者の現状については、かわいそうなんだ、貧しいんだ、何もサービスが無くて、家の中に籠もっているんだ、そういうネガティブなイメージを持たれる方が多いのではないかと思います。そこで敢えて、今、アジア太平洋の中に元気な障害者がいますので、アジアの障害者に焦点を当てて、なぜ彼らが元気になってきたのか、その背景と共に今の彼らの活動の紹介をしたいと思います。実は、私も厳密な意味ではアジアの障害者なのですが、一応彼らとさせていただきます。

1 枚目のスライド(p.16 下)ですが、これはバックグラウンドとして知っていただけたらと思って出しました。基本的に障害を持っている人たちというのは昔の昔、それこそ何も無かった時代には、大家族制度の中で、自宅でケアを受けていました。

そこから、障害を持っている人を一か所にまとめて世話をした方がいいのではないか、そして障害者であってもこんな事ができるんじゃないか、あんな事ができるんじゃないかというアイデアが出てきたり、またそれと平行して経済が進み、今まで家の中で障害者をケアしていた女性が外に出て働くという現象が起こる訳ですね。そのため、施設化がどんどん進みます。障害を持っている人たちは施設に入って、そうすれば家の中でただ置いておかれるよりも、きちん食事もらえるし、毎日が楽しく過ごせるのではという発想の下に、この施設の政策、別の言葉で言えば隔離の政策ですか、これがだんだんと強化されていきます。

それに伴って、障害者が一か所にいるので障害者をケアする技術も発展してきて、医療リハビリテーションの領域での技術がだんだん専門化する、そして拡大していくという状況が生まれます。この状況の中、例えば第一次世界大戦、第二次世界大戦を経て、障害を持っている人の人口が飛躍的に、先進国を中心に増えます。そうすると、その人達を私達はケアしきれぬのか、社会に復帰してもらわなきゃいけないからということで、リハビリテーションの専門職の部分はもっと強化されてきました。

しかし、その隔離をする、障害を持つ人達を別個に扱う、それでいいのだろうかという疑問が第二次世界大戦以降、世の中が落ち着いてきて、みんなが障害を持っている人の状況にきちんと対応しようと考えた時に出てきます。それは、施設収容への疑問であったり、統合とかメインストリーミング、インクルージョンという言葉で表される新しい概念の提案という形で現れます。また、教育においては、特殊教育、こういう障害者だけを別途にしているものはいいいだろう、インクルージョン教育が当然なんだ、その考え方も出てきます。

その中から障害を持っている人の権利を認めようという動きも生まれ、権利意識が高まったところで、2006年に国連で障害者の権利条約が採択されました。そして、めでたく今年の5月に批准をする国が20カ国を越えたので、これで条約として正式なものとして認められました。今後、どういう方向に進んでいったらいいかについては、私の提案は障害者が地域の中で確立した個人として、他の人達と平等なレベルで生活できる、自立生活を提案したいと思います。条約に関して言えば、2008年の6月9日現在の情報ですが、世界27カ国が批准しています。その中でアジアは、バングラディッシュ、インド、フィリピンが批准しました。タイでは今国会審議を経ていて、もうじき批准だと聞きましたが、まだその数は多くはありません。ただそのインパクトは後ほどお話いたしますが、大きなものがあると思います。

これが、批准した国の状況です(p.17 下)。多分、皆様から見て黒く見える国が全く署名も、批准もしていません。署名というのは条約を守っていきますという国の意思表示みたいなもので、全く意味はなさないので、それすらしていない国です。多いですね。こうして見ていただくと。特に大国のロシアとかアメリカはしていません。

それから、皆様から向かって1番右の **Ratified Convention&Protocol**。この条約と議定書、もしくはそのもう1つ左の、条約だけを批准した国というのは、アフリカで構目立っているかな。やっぱり途上国が多いですね。何故かという途上国の場合には法制度が整っていません。それが為に批准するにしても、すぐに国内法との摩擦という問題がないので可能な訳です。ところが、日本のように障害者に対する法制度が整っている国においては、これを批准しようとなると国内法との調整が必要であって、私達、障害者の運動をやっている者にとっても、これをすぐに批准するよりも、むしろ国内法をきちんと条約に合わせて整備して、そして批准して欲しいと思っているので、問題なく待てるという状況です。

アジアの国々で条約に批准している国は少ないにしろ、ここ近年、随分権利意識というのが発展してきています。それが、アジア太平洋の中で条約の討議に加わって、それを成立させた力にもなっているんですが。例えばどのようなレベルでこれが、アジアの中で進んできたかを考えてみます。

まず、世界に目を向けますと、71年に知的障害者の権利宣言、75年に障害者の権利宣言があって、障害者の人権という意識が向上しています。ただこの場合の世界レベルは、アジア太平洋レベルにそんなに影響を及ぼしていません。

むしろ、アジアが関与するようになったと言われるのは1981年のIYDPと言われる国際障害者年です。この時にはアジアの多くの途上国の人達に聞くと、やはり自分の国の障害に関する歴史を語る時に、この時から語り始めたい、この時にいろんな事が起こってきて歴史はここに始まるような気がすると言う人が多いんですね。それ位、インパクトを与えた年です。この年が重要なのは、**International Year of Disabled Persons**、「障害者自身の年」になっていることです。最初の提案では障害者の為の年だったんですね。それを世界の障害を持っている人の為じゃなくて、障害者の主体的行動を尊重しようという意識から名前が変わりまして、これによってアジアでも人権を中心とした福祉という考えに影響されるようになりました。

そして82年には、IYDPに続く障害者の10年の為の行動計画ができましたが、結局、10年はアジア太平洋ではあまり活発ではなくて。この10年を延長しようかどうかと考えた時に、アジア太平洋の人達は、ぜひこの10年は続けて欲しいと希望しました。ところが他の国際的な障害者団体、特に先進国の団体は10年やって、あんなに上手くいかなかったんだからと。このままやっても何にもならないから、条約の形で新たに運動を起こそうと提案し、先進国、途上国の意見もまとまらず条約の提案は否決されたまま、アジア太平洋では独自に1983年からアジア太平洋障害者の10年を始める訳です。それで、これは1993年から2002年の間の10年で、アジア太平洋独自の、国連を巻き込んで、ESCAP、つまり国連アジア太平洋経済社会委員会を主体、中心として活動計画をつくりました。

この10年の特色なんですけれども、今までと違って、策定時から障害者当事者団体が参加しています。それからプロジェクトの実施においては、NGOと共同で実施しています。それから各国政府に意思表示を迫るような「アジア太平洋の障害者の完全参加と平等宣言」これに署名するようにしています。それから、行動計画を作る時にも事務局であるESCAPがたたき台を作って、広くみんなにまわし、そしてこの**Agenda for Action**が成立しました。その結果**Agenda**は、いろんな人の意見が入っている、かなり長いものになってしまいましたので、それを整理してターゲットを作りまして、いついつまでにそれを実施するというような、分かりやすい形の行動計画に変えています。それからESCAPでは2年に1回、進捗状況の検討会議がありましたので、国は否応なしに何かやらなければならない、そうしなければ報告する事が無いという状況に追い込まれた訳です。

そしてこの10年は、2002年までに様々なことをいろんな国で起こしまして、国連の10年に比べて、すごく成功であるという評価を勝ち得ました。その為、障害当事者団体は第二次の10年をと希望しました。私が属するDPI、障害者インターナショナルは

1999 年に ESCAP で「アジア太平洋の障壁からの開放」の十年を提案しました。つまりアクセシビリティというのは誰にとっても、どの障害にとっても問題ですので提案をしたのですが、それがいろいろな討議を経まして結局 2003 年から、長い名前ですが「アジア太平洋地域の障害者のための包括的で、障壁から解放され、権利に根ざした社会に向かう行動のためのびわこミレニウム・フレームワーク」という行動計画となりました。BMF と言います。そしてその中で 7 つの優先分野が出されました。

見てください(p.20 上)。優先分野の 1 番中心となる、重きを置かれている所は障害者の自助団体です。今までは、このような行動計画においては必ずリハビリテーション、それがトップに出てきました。しかし、もう第二次アジア太平洋の 10 年の時代、つまり BMF の時代になると優先課題は障害者のエンパワーメント、自助団体を通してのエンパワーメントです。もちろん地域の事情を考慮して家族および親の会のエンパワーメントも、それから女性障害者のエンパワーメントも重要視されているので、真ん中の丸の中に入っている訳です。そして、そのエンパワーメントを実施する方法として中心を囲むかたちで 5 つの課題、例えば雇用であったり、交通機関のアクセス、コミュニケーションでのアクセス、貧困削減、教育、そういうものが入ってきて、今までとガラッと違う構成になっています。つまりアジア太平洋の障害者はそこまで政府の見方を変えるぐらいに力をつけてきてるんですね。

法律の分野でも同様なことが言えます。スライド(p.20 下)のような法律がいろんな国で第一次、第二次の 10 年の間に整備されました。今まで法律というのは政府が作って、それを障害者、関係者が受益者として受けるという、そういう形だったんですが、この 10 年の間にこの法律の流れを見てみると、主立った法律の策定には必ず障害者団体が関与しています。例えばインドの 95 年の障害者（均等機会、権利保護、完全参加）法それから、タイの障害者リハビリテーション法、バングラディッシュの障害者福祉法、マレーシアの障害者法、これらは政府が法案を準備しているその最中、障害当事者団体が多くの意見を寄せましたし、また、なかなか政府が採択しないのに業を煮やして、障害者団体が座り込みをする、政府に対して要望を出す、そのような政治行動も起こしました。その結果、成立した法律です。

今、私が期待しているのはカンボジア、ベトナム、ラオス。これらの国ではもう法案ができてるんですね。カンボジアにおいてもラオスにおいては、障害当事者団体がこの策定に関わっていて、早く政府に採択をしてくれと迫っています。この 2 カ国で準備ができているんだから、早く採択して欲しい、きつとこの権利条約の進展に合わせて、法律もできるのではというのが 1 つの期待です。それからベトナムに関しましては、政府のほうが先に動きました。もう諸外国では立派な法律ができています、しかし我が国では政令しかない、政令というのは法的な力を持たないものですよ。だから法律を作りたいということで、この草案の作成のために、例えばとてもいい障害者の人権法であるというアメリカの ADA、障害を持つアメリカ人法。それから日本にきて障害者の自立生活、そういうものをベトナムのお役人が勉強して帰りました。その結

果、ベトナムでは障害当事者が政府に対して要望を出すところまで行くかどうか分かりませんが。私達、外国の仲間つまりアメリカの障害者、日本の障害者を通して、ベトナムの障害者が欲するような法律ができるお手伝いができているのではないかと思います。カンボジア、ベトナム、ラオス、これらの国での法律がうまくいくことによって、10年で築かれたアジア太平洋での障害者の権利に関する考え方がもっと強化されたと言えます。

アジア太平洋の障害者の10年では、アジア太平洋の障害者は自分たちのために一次・二次の、つまり1993年から2002年、2003年から2012年までの20年を決定し行動したわけですね。でも、それが期せずして世界に大きな影響を与えました。つまり、この意味では世界に対するリーダーシップが取れたわけです。例えば、アジア太平洋の10年が上手くいっている、というのを見たアフリカが、もう2000年には自分たちでアフリカの障害者の10年をやりたいという事で、アフリカ統一機構、今のアフリカ連合ですよね。それを動かしてアフリカ障害者の10年を作りました。

それに刺激を受けて中東の国々は、アラブ障害者の10年を2004年から2013年の10年の枠組みで今、実施しています。ちなみにアフリカに関しましては、アジア太平洋と同じように第二次を今、模索しているところです。ラテンアメリカの国々もアジア太平洋のように、やっぱり10年がなければ自分たちの地域は後れたままであるという現実直面して、いろいろな形で10年をやりたいと頑張ってきたんですけども、例えば障害者年の1年だけにされてしまったとか、なかなか行動のきっかけがなかったものが、やっと2006年になりまして、米州機構という北米、南米を包括する機構がありますよね。そこで障害者の権利と尊厳のための米州の10年を採択することができました。アジア太平洋の障害者は、ただ大人しいだけではなくて、世界にこのようなモデルを提供できたわけです。

モデルとなる障害者はどんな考え方を持っているのか。まず、もう自分たちの障害に対しては、否定的な見方をしません。肯定的な障害者観を持っています。つまり障害は悪い事ではないという考え方。例えば皆様もいまだに「障害予防」という言葉を使っていらっしゃるのではないかと思います。「障害予防」という言葉はもう使わないでください。「障害原因の予防」もしくは「障害となる状況の予防」そういう風に言っていただきたいと思います。「障害予防」としてしまうと障害は悪い事だから防がなければいけないという意味になりますから、私達自身も決してそうは言いません。自己否定につながるんですよね。「障害予防」ではなくて「障害原因の予防」を使用し、障害は悪い事ではないと主張しているのです。

また、私たち障害者の間でよく言われているのが「Nothing about us without us」という言い方です。つまり「我々に関して何事も我々抜きにはできない、決められない」という高いプライド、権利意識がその背景にあるのです。これは今、あちらこちらで使われているフレーズで、先進国だけではなく途上国でもこの言い方は当たり前のよう

に使われています。

新しい障害者観のもう 1 つは、高齢化社会の問題に影響を受けています。障害を持っている人は高齢化社会の中でのパイオニアです。例えば皆様、駅でエレベーターをご覧になったことがありますよね。最初、政府はエレベーターではなく、エスカレーターの方が安いから、障害者用の施設としてエスカレーターを作るという事に固執したんですが、日本の障害者は「そうではない。エレベーターを作ったらみんながそれに乗れる。エスカレーターだったら障害者を乗せる為にそれを止めて他の人の通行を妨げて使わなければいけないから、駄目なんだ。高齢者には使いにくいから駄目なんだ」という事を強く主張して、エレベーターを選びました。この考え方は広く海外でアクセスの運動を進める時に伝えられて、海外の障害者も障害者の階段、段差の解消にはエスカレーターではなくて、リフト、エレベーターをと、という風に運動するまでに至っています。もちろん使っているのは高齢者のみでなく、乳母車のお父さん、お母さんもすごく多いですよ。障害者は、高齢化社会、住みよい社会へのパイオニアです。

このようにアクセスが整ってくると、障害を持っている人達は町に出ることが可能になってきます。バリアフリーになってきます。バリアには物理的なバリアだけではなくて、コミュニケーションのバリア、制度上のバリア、そして人びとの中にある態度のバリアがあるのですが、それらがバリアフリーになると、自立生活運動、つまり障害者が一個の人間として自立して社会の中で生きていく、という思想が芽生えます。これは、具体的には 1972 年にアメリカで始まった運動ですが、先進国にどんどん広まり、そしてこれがアジアの途上国の中で広まっています。まず日本の考え方が韓国にいき、またタイにいき、そしてパキスタン、マレーシア、フィリピン。それらの国々では確固とした自立生活運動があり、自立生活センターが誕生しています。この運動は今まであった障害別の様々な運動体と異なり、クロスディスアビリティ、つまり、障害の枠を越えて発展しています。それがこの運動の強みです。障害者として 1 つの声でパラダイムシフト、考え方の変革を叫び、また環境の変化を要請していくことができるのです。そしてこれは、障害者がエンパワーされたのでセルフヘルプ、自助の活動でもあります。

パキスタンの場合ですけれども、ピア・カウンセリングがまず紹介され、それからスライドで見て下されば分かるように、新しい運動としてイスラム圏の活動に関わらず女性まで巻き込んだ一大運動となっています。彼らはパキスタンで起こった地震の際には、特に家の下敷きとなって障害者となった女性のために大きな働きをしました。

韓国での自立生活運動では、韓国の障害者運動が強力であることがその発展を助けました。例えば、これは駅なんですけれども(p.23 上)。国がなかなかエレベーターをつけなかったんです。簡単なリフトで、それも係員無しで自分で操作しなければいけなかったんで落ちて死んだ人が 3 人も出た。もうそこで自分たちは待っていられない、

という形でデモを繰り広げました。これは地下鉄の駅です。障害者の何人かは、その線路の所まで降りて自分たちの体や車椅子を鎖で線路にくっつけて、写真見せてもらったんですけども、もう向こうから地下鉄がどんどん、どんどん近づいてくるんですね。そういう中、体を張ってアクセスの為に戦いました。また、バス、地下鉄等でのアクセスを図るために人権委員会に籠城もしましたし、かなり力づくの運動ですが。今、韓国では日本よりも短時間で多くの自立生活センターが全国に誕生するに至っています。

フィリピンに関しましては、まだ歴史が浅く始まったばかりで。みんながハードな面だけではなくてソフトの面からということで、ピア・カウンセリングに力を入れているところです。

タイでは、自立生活の運動家がスライド(p.24 上)で見て下されば分かるように、例えばスカイトレイン、モノレールのことですね、そのアクセスを求めてデモをしました。それから左の写真は、新しくできた国際空港のアクセスチェックをしているところです。そういう時に彼らは一丸となって働きますし、また、自分たちの中での重度障害者を助けるということに一番力を入れているのが、タイの自立生活運動です。

自立生活運動が権利の推進のために、今後大きく発展すると考えるのは、自立生活センターが個人の自己決定を重視するからです。自己決定、もしくは自己選択としてもよろしいですが。自立生活センターはサービス事業体として、さっきお話したピア・カウンセリング、それから自立の技能を伝える自立生活プログラム、それから、重度障害者の生活になくてはならない介助サービスを提供し、また運動体の側面も持っていて、個人アドボカシー、システムアドボカシーも行います。これらの活動によって私は、アジアの障害者がさらにエンパワーされ、そして権利を基盤とした新しい時代を築いていくのでないかと期待しています。きつここれに続いてお話いただくアジアからの参加者の方達も何かいいニュースを話してくださるかと思います。ミャンマーでは、障害当事者が中心となって仲間を助ける時代になっているということをお話を AAR の情報で見てとても嬉しかったです。そういう時代。私達が私達の仲間を助けて、そして障害のない人も支援できるような、そういう時代がくるということをお約束したいと思います。

ありがとうございました。

勝間

中西さん、どうもありがとうございました。拍手で感謝したいと思います。後ほど、中西さんからはいろいろなコメントをいただきたいという風に思っております。中西さんのお話を伺いまして、非常に感銘を受けることができました。「障害者の権利条約」というものが成立している、という事ですね。2006年に採択されて、そして2008年5月、今年ですね、20カ国が批准することによって発効したということです。これは皆さんも新聞記事などご覧になっているかもしれません。その中でアジアでは、

バングラディシュ、インド、フィリピン、この3カ国が既に批准をしているという事でした。そしてタイが今、国会で議論しているという風に伺いました。この障害者の権利条約というものは、グローバルなレベル、世界規模でのレベルでの人権レジームという風に言うこともできます。国連憲章から始まって、世界人権宣言が出されてから、ちょうど今年は60周年になります。そして、このほか、2つの国際人権規約があります。

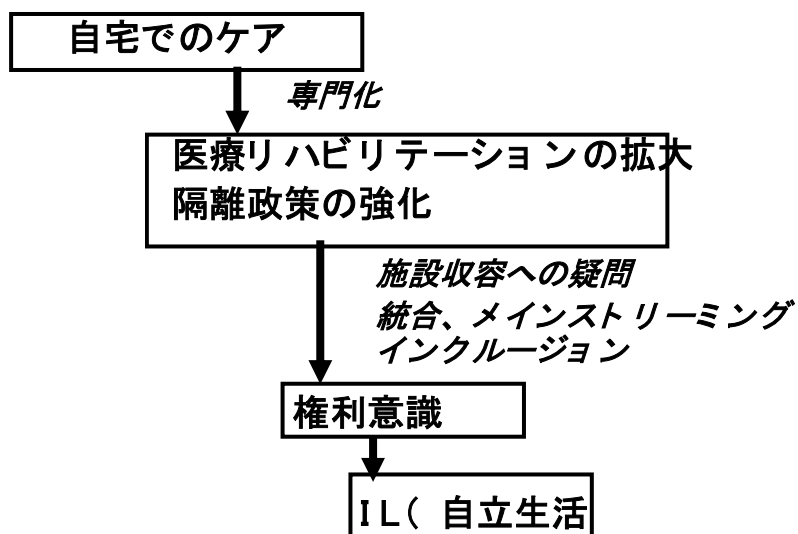
そして、子どもの権利条約とか女性差別撤廃条約、あるいは移住労働者の権利条約といった個別分野でも国際人権が促進されてきました。そういった大きな人権条約というのがあるのですが、それに加えて、障害者の権利条約というものが遂に発効した、そして、それが今年の2008年であるというお話だったかと思います。こういったグローバルなレベルでの人権レジームと、当事者の人々のエンパワーメントというものをどうやって埋めていくか、ということが非常に大きな課題だなと思いました。そのためには、地域レベルでの、特にアジア太平洋における「障害者の10年」というものが非常に大きな地域的な動きとしてあったということ。そしてアジア太平洋の国々においてもですね、人権の制度化、法制化というものが進められてきた。そしてせっかく法律になってもそれが実際に実施されないとあまり意味がありませんが、その実施においては、当事者の人々が現場で自ら検証しながら、バリアフリー、アクセシビリティを求めていくと。そういった運動が展開されているというお話だったかと思います。それでは、今回の主催者であります「難民を助ける会」がこういった形で障害を持つ人々の自律支援を支援してきたか、そういったお話を少し伺いたいと思います。

権利条約で変わる
アジアの障害者
The Convention Changes
Persons with Disabilities in Asia

アジア・ディスアビリティ・インスティテート
Asia Disability Institute

中西由起子 Yukiko Nakanishi

障害者の状況の変遷
Transition of situation of PWDs



アジアでの権利条約の批准国 Asian countries ratified the convention

2008年6月9日現在

世界27か国中

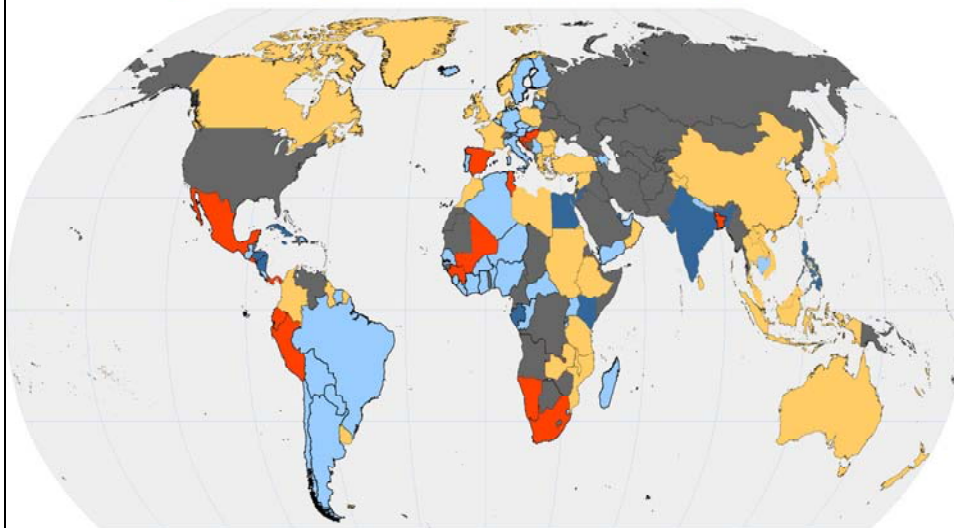
- バングラデシュ
- インド
- フィリピン

批准・署名状況 Signature/Ratification



<http://www.un.org/disabilities/documents/maps/enablenmap22May08%20copy.jpg>

■ Not Signed ■ Signed Convention ■ Signed Convention & Protocol ■ Ratified Convention ■ Ratified Convention & Protocol



アジアでの権利意識の発展

Development of Awareness of PWDs' Rights in Asia

- 世界レベルでは、71年に知的障害者の権利宣言、75年に障害者の権利宣言があり、障害者の人権という意識が向上していった。
- アジアが世界の障害問題に関与するようになったのは、1981年の国際障害者年であった。International Year of Disabled Personsという障害者主体の年をへて、アジアも福祉的観点から人権を中心とする観点へと移行していった。
- この年の成功が、82年の「障害者に関する世界行動計画」、その実施にあたって国連障害者の十年(1983—1992)」の採択となった。
- 十年の最後に、人権条約を含め障害者の人権に焦点を当てた文書を作ろうという動きがあったが、十分な支持を得られなかった。アジア太平洋では十年を継続することを望んだが、先進国が賛成しなかった。
- 妥協案として、世界レベルでは国連で1993年に「障害者の機会均等化に関する標準規則」が、アジアではESCAP(国連アジア太平洋経済社会委員会)でアジア太平洋障害者の十年(1993-2002)が採択された。

第一次障害者の十年

The First 10 Years:1993-2002

- 初の地域の社会経済委員会
ESCAP(アジア太平洋経済社会委員会)による決定
- 行動計画である
Agenda for Action(行動課題)と107項の目標の採択



第一次十年の特徴

Characteristics of the First 10 Years

- 策定時から障害当事者団体が参画
- プロジェクト 実施におけるNGOとの連携
- 政府による「アジア太平洋の障害者の完全参加と平等宣言」の署名
- すべての関係者が参加しての行動計画 Agenda for Actionの策定
- アジェンダ実施のための、ターゲットの設定
- 国の障害調整委員会を招いての隔年での推進状況検討会議の開催

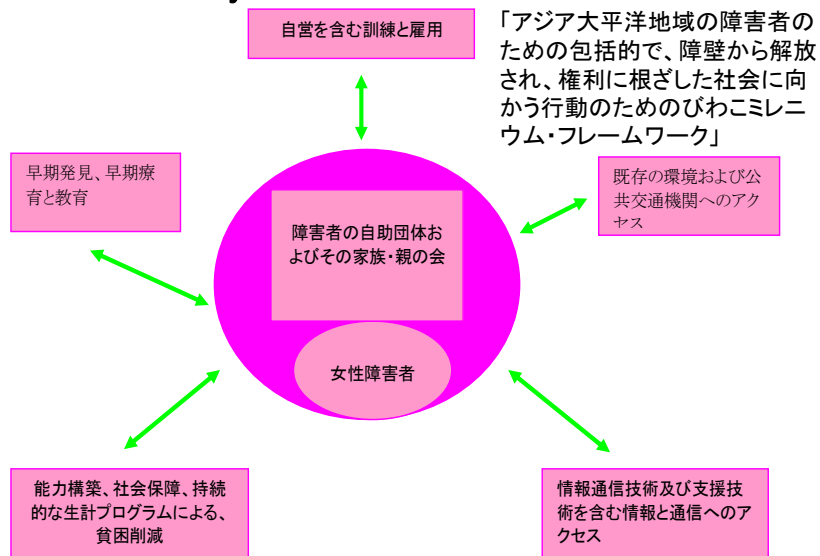
第2次十年(2003-2013)に至る経過

Development to the Second 10

Years(2003-13)

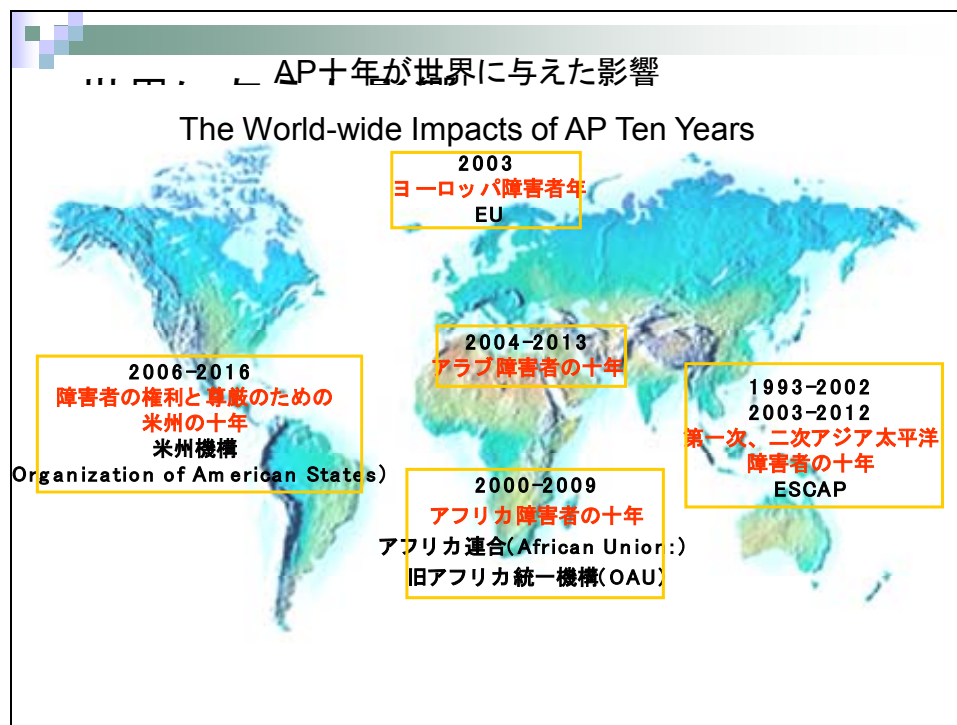
- DPIが1999年にアジア太平洋障壁からの開放運動として提案
- 「アジア太平洋地域の障害者のための包括的で、障壁から解放され、権利に根ざした社会に向かう行動のためのびわこミレニウム・フレームワーク」を策定
- 7つの優先分野を決定
各分野には重要問題とターゲットが準備され、その実施期間となすべき行動が明記された。全体で、ターゲット達成のために18のターゲットと15の戦略が決められた

BMF行動計画での7の優先分野 7 Priority Areas in BMF Action Plan



アジアの法整備: Development of Laws in Asia

インド	障害者(均等機会、権利保護、完全参加)法(1995)
インドネシア	障害者法(1997)
韓国	障害者福祉法(1981年心身障害者福祉法を2000年に改定)
スリランカ	障害者権利保護法(1996)
タイ	障害者リハビリテーション法(1991)
台湾	心身障害者保護法(1997に障害者福祉法を改正)
中国	中華人民共和国障害者保障法(1990)
ネパール	障害者保護福祉法(1982)
パキスタン	障害者(雇用とリハビリテーション)政令(1981)
バングラデシュ	障害福祉法(2001)
フィリピン	障害者のマグナカルタ(1992)
ベトナム	障害者に関する政令(1998)
マレーシア	障害者法(2007)
モンゴル	障害者社会福祉法(1998)
香港	障害差別禁止条例(1995)
準備中	カンボジア(採択まち)、ベトナム(草案策定中)、ラオス(採択まち)



新しい障害者観の創造
Creation of New Views of PWDs

- 肯定的な障害者観—障害は悪いことではない

障害予防

→

障害原因の予防
 障害となる状況の予防

- Nothing about us without us
- 高齢化社会でのパイオニア

自立生活運動の発展 Development of Independent Living Movement

- 先進国での有効とされていたIL運動が途上国でも始まる
韓国、タイ、パキスタン、マレーシア、フィリピン
- クロス・ディスアビリティ
- 自助活動

パキスタンのIL IL in Pakistan



韓国のIL: IL in Korea



フィリピンのIL: IL in the Philippines



タイのIL IL in Thailand



ILセンターによる個人の自己決定を確立するための活動
Activities of IL centers to establish self-determination

- サービス事業体として:
 - ピア・カウンセリング
 - 自立生活プログラム
 - 介助サービス
- 運動体として:
 - 個人アドボカシー
 - システムアドボカシー



エンパワー
された障害
者による、
権利を基盤
とした新しい
時代の到来

◆ 難民を助ける会の障害者自立支援活動の紹介 ◆

堀江 良彰

認定 NPO 法人 難民を助ける会事務局長

勝間 「難民を助ける会」の堀江さんにプレゼンテーションをお願いいたします。よろしくお願い致します。

堀江 皆様こんばんは、「難民を助ける会」で事務局長をしております堀江良彰と申します。海外のゲストの話に移る前に、もう 10 分だけお時間をいただいて「難民を助ける会」がどういった障害者の自立支援活動をしているのかというのをご紹介させていただきます。

その前にごく簡単に「難民を助ける会」がどういう会かというのを簡単にご紹介します。「難民を助ける会」は、1979 年に当初は「インドシナ難民を助ける会」として、今も会長であります相馬雪香（平成 20 年 11 月 8 日逝去）によって設立されました。来年ちょうど 30 周年を迎えます。これまで 50 カ国以上で活動してきました。基本的には、政治、思想、宗教に中立の立場で人道支援活動に取り組んでいるといった団体です。現在は、ご覧の海外 9 カ国で活動しております。

さて、「難民を助ける会」がどういった障害者の支援をしてきたかというのをご説明します。まず 1980 年代から、例えばタイ・カンボジア国境の難民キャンプで車イスを配布するといったような活動をしてまいりました。つまり、当初は難民支援、難民救援活動の一環として、地雷や戦闘の被害者に対して、そのような障害者に対して支援をするといったことから始まったと言えます。現在は、すべての障害者が社会に平等に参加できることを目指して活動しております。

途上国における障害者の状況ですけれども、そもそも社会福祉という概念が優先順位として極めて低いという現状があります。また、社会的偏見も強かったり、そのために仕事がないといったような状況もあります。あるいは障害者の基本法などの法整備の面でも遅れが見られます。また、NGO 活動そのものを制限する国もあります。そのようなことで障害者あるいはその家族と貧困というものが悪循環によって結びついてしまっているという現実があります。

その中で「難民を助ける会」は、1 つは障害者やその家族が自立して生活するための技術を身につけたり、あるいはそもそも持っている能力を高めるような支援をしたり、または障害者やその家族へ社会的理解が得られるような活動をしてきました。

現在では、障害者支援をしている国とは、この赤く囲んでいる国、アフガニスタン、タジキスタン、ラオス、カンボジア、ミャンマー（ビルマ）といった国々で、この右にあるような職業訓練事業や車イスの配布といった事業をしております。

少し具体的な例を紹介します。例えば、カンボジアの職業訓練の様子です。カンボジ

アでは、首都のプノンペンというところに、障害者の職業訓練センターを 1993 年から運営をしております。こちらは、電子機器、テレビやラジオといった機器の修理コースの様子です。あるいはオートバイの修理コース。これは、徒弟制度と言いまして、もともと訓練校を卒業した生徒の家に弟子入りする形で新たな訓練生が技術を身につけるものです。こういった修理コースで技術を身につけて自立をしていくといったプログラムをやっています。1993 年の開校以来カンボジアでは、650 人以上に対して職業訓練を実施してきました。

また、ミャンマーでも職業訓練をしております。こちらでは、縫製と美容理容といった 2 コースを設けています。今回のゲストのミャッモーさんも、このミャンマーの訓練校のチーフインストラクター、講師です。もともとこの訓練校で勉強して、その技術を今は先生となって教えております。ミャンマーでは、2000 年にこの訓練校を開校して、それ以来 620 人以上の卒業生が生まれております。

カンボジアとラオスでは、車イスを製造しております。障害者自身が車イスを作るという状況で、カンボジアでは、年間 300 台の車イスを製造しております。またラオスでも障害者各人の生活環境や体に合った車イスを作るべく理学療法士による専門家からのアプローチを強化して実施しております。具体的には、車イスを作る前に査定と呼ばれる、体の採寸や環境をよく調べるといったようなことをして各人の生活環境にあった車イスを製造しております。ラオスでは、年間約 400 台の車イスを製造しております。これまでにカンボジアでは 1994 年以来約 5000 台、ラオスでは 2000 年以来 2200 台の合計 7200 台以上の車イスを配布してまいりました。

アフガニスタンでは、協力団体と連携しまして理学療法のクリニックを運営しております。また必要な患者には、同じく協力団体に搬送しまして、義肢や装具といったものも供与しております。この理学療法のクリニックには、年間 7000 人くらいの患者さんがいらっしゃるといった状況です。これも理学療法の様子です。

またタジキスタンですが、私もちょうど先週タジキスタンに行ってまいりました。こちらでは、地域の障害者団体が行う養蜂事業、蜂蜜の事業を支援しております。障害者のための栄養の改善と蜂蜜の販売による経済状況の改善を図っております。

最後に緊急支援ですけれども、5 月 2 日にミャンマーを、サイクロンが襲いました。現地に早速日本人を派遣しまして緊急支援を実施しました。今回の緊急支援では、主に障害者家庭、障害者世帯を中心にお米ですとか食用油、水、塩、鍋といった生活必需品を配布しております。現在も、実はもう災害から 1 ヶ月以上経ちますが、なかなか支援が届かない現状があり、まだまだ支援が必要です。どうぞ皆様からのご支援を頂ければと思っております。

以上が「難民を助ける会」の障害者支援についての紹介です。どうもありがとうございます

いました。

勝間 堀江さん、どうもありがとうございました。

◆ パネルディスカッション ◆

報告 1：アフガニスタンから

(アジズ・アフマッド・アデル)

勝間 それでは、これからは、現地からの報告ということで、海外ゲストの皆様からお話を頂きたいと思います。第一の報告者は、もうすでにご紹介いたしましたが、アフガニスタンから来ていただきましたアジズ・アフマッド・アデルさんです。よろしくお願い致します。

アジズ 皆さんこんばんは、この貴重なお時間を頂きましてありがとうございます。障害者支援に関してアフガニスタンの状況をお話しさせていただくことを感謝しております。皆様とこの大学の皆様とお会いできること大変光栄です。

まず、4つの基本的なことについて、アフガニスタンでの活動についてお話したいと思います。まず、このスライドにある通りにお話しをしていきたいと思います。

私の名前は、アジズ・アフマッド・アデルです。カブールの理学療法専門学校の理学療法士です。これは、アフガニスタンにおける主な理学療法専門学校で、私はカブールで働いており、またカブールに住んでおります。地図でご覧のとおりアフガニスタン、私の国の情報が出ております。アフガニスタンは、アジアの中央部に位置しております。正式名所は、アフガニスタンイسلام共和国です。人口は、大体 2200 万から 2500 万ということです。面積は日本の 1・5 倍です。首都は、カブールです。そして民族構成は、パシュトゥーン人、タジク人、ハズラ人、ウズベク人などです。そして国の宗教は、イسلام教が主です。また、主な国の言語は、ダリ語そしてパシュトゥーン語です。

こちらのスライド(p.37 上)は、私どもの文化をご紹介したいと思って入れました。アフガニスタンの人たちは、勇敢な人たちで、もし機会を与えられれば成功を収めることができます。このゲームは、ブズカシという名前のゲームです。これは、アフガニスタンの国民的なスポーツです。そしてこちらもアフガニスタンの別の側面です。

ご存じの通り、アフガニスタンでは、20 年以上に亘り内戦があり国が破壊されています。多くの方が家を追われて隣国イラン、パキスタンなどに避難しています。2001 年にタリバン政権が崩壊しましたので、人々が徐々に国の自分の自宅に帰還しつつあります。しかしその住宅は、この内戦で破壊されています。これ(p.37 下)がその破壊された家を表しております。

また、アフガニスタンは非常に歴史のある国です。多くの知識人や哲学者がアフガニスタンで誕生、そして輩出されました。非常に気候もよく、山も高く、また新鮮な水も泉から得られます。そしてアフガニスタンの人々は、お客様を大切にする、歓迎す

る気質があります。

このスライド(p.38 下)はカブールの一部、アフガニスタンの首都です。住宅が山の上に建てられているのがご覧いただけだと思います。ですから市場に行ったり、家に戻ったりするために、障害を持つ人は毎日、この山を上り下りしなくてはいけないのがいかに大変かとお分かりいただけると思います。

また、このスライド(p.39 上)に写る車は日本の中古車です。アフガニスタンに日本の中古車が持ち込まれたのだと思います。女性はスカーフをかぶっています。そして子どもたちは、この車に乗って学校に行っているわけです。輸送システム、交通システムもかなり破壊され、いろいろな問題があり、人々はこういった車を使って移動しています。

また、アフガニスタンの観光のもう1つの側面です。観光客がここには非常に関心を持っております。バーミヤン市です。日本でも人気があるかと思います。大きな仏像のある場所です。これは、バンデ・アミルという湖です(p.39 下)。淡水が豊富です。そしてアフガニスタンに来る多くの観光客にとって、この場所だけは見逃せないという所です。

さて、障害者に関しては、アフガニスタンの人々は、伝統的に障害者を尊重しておりいろいろと助けてきました。例えばあまり仕事をさせない、あるいはあまり移動をさせないようにする。とにかく何処かに座って、そして気分よく過ごしてもらおうとしています。しかし障害者には、いろいろと問題があります。例えば仕事を見つけるのがとても大変、あるいは、ほとんど不可能という場合もあります。というのは、ほとんどの雇用主は、障害者は仕事ができない、適切に仕事ができない、きちんと仕事ができないと思っているからです。またもう1つ、結婚をするということも難しい点です。結婚がなかなか出来ず、常に孤独で貧困であるという場合が多いわけです。

私が基本的に行っている活動、アフガニスタンで行っている活動ですが、私のプロジェクトは、理学療法ですけれども、障害者の支援で非常に重要なポイントです。それから2つ目は、障害者を支援するにあたってその身体機能回復、モビリティ、移動を助けるということです。我々のプロジェクトの中でこの移動ということは、非常に重要です。また社会参加も重要な点です。障害者が社会に参加できるように支援していきます。また自立をする、日常生活で自立ができるようにするということも支援しています。これらが私たちのプロジェクトで行っている活動です。

ご覧の通り、プロジェクトの1つの側面は、理学療法です(p.41 下)。理学療法の先生が生徒に対して教えています。治療のための超音波を、ポリオの後遺症でまひした、少女の足にどのように当てていくかを教えています。アフガニスタンでは、まだポリオの問題があり、ポリオの後遺症でまひ障害を持つ人がいます。またこれは、男性が

腰痛で苦しんでいます(p.42 上)。そして理学療法士がこの姿勢をどう正すか、そしてどのように運動したらよいか指導しております。これは、リハビリテーションの一環です。症状の悪化を予防するため、リハビリテーションを行っております。こちらの方は、トレーニングの一部です(p.42 下)。この人たちは、普通の人ではなくて、みな医師、医者です。このように、医師も訓練しています。障害についての意識を高めるための指導をしています。というのは、医師が最初に患者さんと接触する人たちだからです。直接患者さんとやり取りするので医師自身が障害者にどう対応するか、どう支援するか、そして適切な場所へとどう患者さんを紹介していくかということを指導していかなければなりません。

そして、課題もその中にはあります。主な課題としてあるのは、障害者の社会への統合です。先ほど申しましたように、最初のスライドで申しましたが、文化的に伝統的にアフガニスタンの人々は、障害者に外に出て行ってほしいと思っていない、とにかく家の中にいてほしいと思っているわけです。それが1つ問題となっております。つまり社会に統合されていない、家で孤立しているわけです。それから2つ目は、教育です。こちらでもご覧になれると思います。もし学校に行く必要があるとすれば、まずそこまで移動しなくてははいけません。では、その移動の手段を誰が与えてくれるのか、誰が支援してくれるのかという問題があります。次の文でお分かりいただけたと思いますが、理学療法というのは、あまり認知されておられません。ですから理学療法もこのリハビリテーションの一環なわけです。この運動の中で理学療法も提供しております。しかし社会であまり認知されておられません。これも1つ課題として直面しております。

では、それにどう対応していくかということですが、私どもの考えでは1つ重要な点というのが、認識・意識改革のプログラムです。それぞれ地元の社会、あるいは社会一般、そして人々の意識啓蒙活動です。障害者をどう支援しそして社会に統合していくのか、どうしたら自立を支援できるのか、そして移動することを支援できるかということです。こういったまず認知、意識を高めてもらう必要があります。それから2つ目は、理学療法です。障害者は、理学療法を通じ、社会に統合されていくための身体機能を回復する必要があります。特に、私がこのようなプロジェクト活動中に勇気づけられたことは、やはり喜ぶ顔を見ることがです。たとえば、以前は希望を失くしていた地雷、ロケット弾などで身体機能を失った人の顔に、微笑みが戻ってくるということ、それが私にとってはとてもうれしいことです。

この後お話いたしますのが、ジャミールさんのお話です。7歳の少年でアフガニスタンの西部のヘラート州の出身の少年です。父親は、学校にこの子を連れて行こうとして誤って対人地雷の事故にあい右足を失いました。そして本当に希望を失ってしまいました。もうこれで人生は終わりだと思った、学校にはもう行けないと思ったのです。しかしリハビリテーションを行い、教育を行い、義足・松葉づえを手に入れることにより、学校に行くことが出来るようになりました。これは15年前のことです。そ

して今このジャミールさんは、理学療法を学ぶ機会を得て、理学療法士になりました。そして何百人という負傷や問題を抱えている人たちを助けています。これがリハビリテーションの1つの例です。

こちらでご覧いただけたと思いますが(p.44 下)、障害を持った人たちが他の人たちと一緒にスポーツをしています。このように障害をもった人もスポーツを楽しんでいます。この人たちも、自分も何かができると実感し、この試合に参加しているわけです。つまり悲しみから脱却していくことができるわけです。

最後に私が皆さんにお話ししたいのが私の夢です。まずは、平和なアフガニスタン、そして平和な世界が実現することです。私たちみな、平等そして基本的ニーズへのアクセスを持つべきです。つまり平等そして基本的な人間のニーズをすべての人に実現できるようにしなければいけないと思います。そして人生の選択、宗教を自由に選べるということを考えています。この夢がいつか実現すればと考えています。

皆さんご存じの通り、私たち皆人間として自分自身のことを考えています。自分あるいは家族あるいは国ということ、自分第一で考えがちですが、やはり私たち皆お互い助け合い、他の人の利益も考えていくべきだと思っています。それが1つのポイントです。それからもう1つは、私はアフガニスタンで働いている、皆さんは日本にいる、そしてラオスあるいはその他の国パキスタンなどにいる方もいらっしゃいますが、私たち皆この努力を結集して、世界中の障害者の方々の生活を変えていきましょう。ありがとうございました。

勝間

アジズ・アフマッド・アデルさん、どうもありがとうございました。アフガニスタンから非常に力強いメッセージを頂きました。



障害者自立支援協会
AAR JAPAN
Association for Aid and Relief, Japan

アフガニスタンにおける障害者自立支援

Assistance to persons with disabilities in
Afghanistan



2008年6月 June 2008

名前: アジズ・アフマッド・アデル Name: Aziz Ahmad Adel



障害者自立支援協会
AAR JAPAN
Association for Aid and Relief, Japan

発表の流れ

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) アフガニスタンの紹介
About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



1) 自己紹介

Self Introduction

<報告の流れ>

- ➡ 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



こんにちは！ Hello! Salam aleikum!

私の名前は、アジズ・
アフマッド・アデルです。
アフガニスタンのカブールに
住んでいます。

My name is Aziz Ahmad Adel.
I live in Kabul, Afghanistan.





2) アフガニスタンの紹介

About My Home Country

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
-  2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



アフガニスタン基本情報

General Information about Afghanistan



正式名 アフガニスタン・イスラム共和国
面積 約65万2,225km² 日本の約1.7倍
人口 2,209万人(2006年)
首都 カブール
民族構成 パシュトゥーン人、タジク人、
ハザラ人、ウズベク人等
宗教 イスラム教が主。
言語 ダリ語、パシュトゥーン語

出展: 外務省HP





救世国際救済協会
難民を助ける会



Association for Aid and Relief, Japan

アフガニスタン国情報(1)

Information about Afghanistan (1)

①アフガニスタンの良いところ

What can I be proud of my country?

アフガニスタンは、歴史のある国です。多くの知識人や哲学者がアフガニスタンから誕生しました。またすごしやすい気候で、アフガニスタンにはお客様を歓迎する気質があります。

Afghanistan is a historic country. Many intellectuals and philosophers were born and raised up in Afghanistan. We have good weather and very clean and fresh water from springs. The people of Afghanistan are very hospitable to guests.

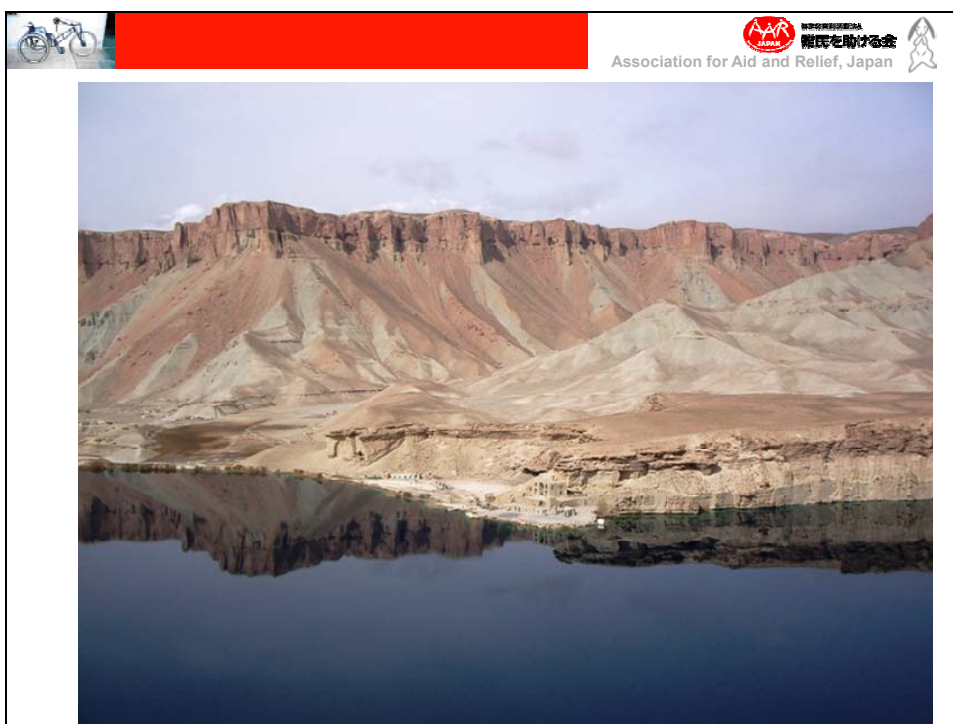


救世国際救済協会
難民を助ける会



Association for Aid and Relief, Japan







障害者支援活動協会
AAR



Association for Aid and Relief, Japan

アフガニスタン国情報(2)

Information about Afghanistan (2)

②障害者を取り巻く環境

What is the environment surrounding PWDs in Afghanistan?

家族や社会は伝統的に障害者を尊重しているが、就労の問題がある。人々が障害者には仕事ができないと考えているためである。そのため、障害者は結婚もできず、孤独で貧困にある場合が多い。

Afghan families and society traditionally respect PWDs. But PWDs have difficulties in getting jobs. Because people tend to think that PWDs are unable to do proper jobs. People also do not want to marry with them. Thus, many PWDs are lonely and poor.



障害者支援活動協会
AAR



Association for Aid and Relief, Japan

3) 私の障害者自立支援活動

My Activities

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- ➡ 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



私の障害者自立支援活動(1)

My Activities (1)

①活動 Activities

首都カブールの理学療法専門学校プロジェクト・
マネージャーとして、障害者のリハビリに従事している
Serving for the rehabilitation of PWDs as the Project
Manager at the Physical Therapy Institute in Kabul

②活動をはじめたきっかけ Reasons of Starting Activities

障害者の身体機能回復、社会参加、日常生活における自立
を支援したいと思った。

To support PWDs to ensure the mobility, the participation
in a society and the independence in their everyday life.







障害者自立支援活動
AAR

Association for Aid and Relief, Japan



私の障害者自立支援活動(2)

My Activities (2) - Challenges

③活動の課題 Main Difficulties

社会・教育分野における障害者の統合

Integration of PWDs in society and education

理学療法への認識の低さ

Unpopularity of physiotherapy



障害者自立支援活動
AAR

Association for Aid and Relief, Japan



私の障害者自立支援活動(3)

My Activities (3) - Responses to challenges

④どのように障害者を取り巻く環境を改善していく予定か How will we change the environment surrounding PWDs?

・障害者を取り巻く社会の意識改革

・理学療法は特に障害者の身体機能回復で貢献可能

Public awareness about persons with disabilities should be enhanced.

Physiotherapy can particularly help PWDs in their physical rehabilitation.



障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan



私の障害者自立支援活動(3)

My Activities (3) - Encouragement

⑤活動中に勇気付けられたこと

What impressed or encouraged me most in my activities?

身体機能を取り戻した障害者が、社会や学校に参加し、喜ぶ顔を見ることが、励みになっている。

To see the happy faces of people who have improved their health conditions and participated in a society and schools encourages me.



障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan





4) 今後の予定とメッセージ

Plan and Messages

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
-  4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



今後の活動について(1)

①私の夢 My Dream

平等で、基本的ニーズや宗教や人生の選択の自由が保障されたアフガニスタンと世界を実現すること

To see a peaceful Afghanistan and the world where all people have equality and access to basic human needs and freedom for their choice of life and beliefs.



今後の活動について(2)

②会場の皆様へのメッセージ Messages

お互い助け合い、他者の事情も考えていきましょう。

Let us support one another and think about the benefits of others, too.

世界の障害者の生活を変えるために、我々の努力を結集しましょう。

Let us gather our efforts to bring changes to the lives of PWDs all over the world.



ご静聴ありがとうございました。

Thank you very much for your sincere listening.

報告 2：ミャンマー（ビルマ）から

（ミャッ モー）

勝間 それでは、報告者の二人目であります、ミャッ モーさんをお願いしたいと思います。ミャッ モーさんは、ミャンマーあるいはビルマから来ていただいています。よろしくお願い致します。

ミャッモー 皆さんこんばんは。今日は、私に発表する機会を与えていただき大変光栄に存じます。最初に、ミャンマーの今般のサイクロン被害に対し皆様方から多大なご援助を頂きましたことに対し心から厚く御礼申し上げます。本日私は、4部構成により発表させていただきます。まず自己紹介を致します。2番目と致しまして私の出身国ミャンマーを紹介させていただきます。3番目と致しまして私の障害者自立支援活動についてお話いたします。4番目と致しまして今後の計画とメッセージ、そのような構成でお話しさせていただきます。まず自己紹介をさせていただきます。

私の名前は、ミャッモーです。私は、ミャンマーのヤンゴンに住んでいます。

引き続き、ミャンマーのことをご紹介いたします。今、見ていただいております地図は、ミャンマーの地図でございます(p.51)。ミャンマー連邦という国名のように、ミャンマーは、多民族国家です。全人口は、およそ 4200 万人です。現在の首都はネピドーです。諸民族には、各々の言語がありますが公用語としてミャンマー語が使われております。国民の多くは、仏教を信仰しています。この写真は、ミャンマーで大変有名なシュエダゴン・パゴダであり、そこで人々が仏様に対して礼拝をささげている様子を撮ったものです(p.52)。この写真は、ヤンゴン市内の平和な様子の一角を撮ったものです(p.52)。この写真は市場の光景を撮ったものです(p.53)。

引き続きミャンマー人およびミャンマーの障害者について若干ご紹介いたします。ミャンマー人は誠実で人を慈しみ、そしていつも美しい笑顔で微笑んでいます。障害者を取り巻く環境につきましては、徐々に改善されてきております。しかしまだ一部の地域におきましては、改善が見られないばかりか差別や蔑視すら存在している状況です。障害者関連法につきましては、すでに草案策定済みであり、また政府に対し提出済みです。国の指導者層によりこれが正式に承認されればさらなる改善が期待されます。

私の障害者自立支援活動についてお話し致します。私は、難民を助ける会ミャンマー事務所の下で設立された障害者のための職業訓練校で美容理容コースの主任講師を務めています。私たちの職業訓練校では、美容理容および洋裁の 2 種類の技術を教えています。以前は、手がなければ洋裁はできない、まっすぐに立てなければ散髪はできないという古い見方の医療モデルが存在していました。私たちは、社会モデルとして

たとえ手がない者でも、また下半身が不自由な者でも、訓練校の講師たちの経験に基づいた意見を参考に、あらゆる障害に対し他の障害者達と共に解決方法を探し求め、障害者自身が選択し決定するよう、活動し教えています。訓練修了後訓練生たちは、実習訓練の場として開設された洋裁店舗や美容理容店舗で働き自立し生計を立てております。訓練修了生の一部は、その母校である訓練校に講師として戻ってきて活動しており、また自身も自立して生活し社会的経済的水準の向上を図り、人々の中に平等に入っていくことが出来るように支援をしています。この写真は、私たちの美容理容訓練校内で実習を行っている様子を撮ったものです(p.55)。この写真は、ディスカッションの場で私がファシリテーターとして役割を果たしている様子を撮ったものです(p.55)。初期は、困難なこともありましたが私は根気よく活動し続けることで少しずつ一般の人々も障害者に対して重きを置き、尊敬するようになってきた上、引き続き活動するようにと応援してくれています。ですから私もより一層健康に常に張り切って活動しております。

私の夢についてお話いたします。私の夢は、熟練した美容理容技術者として常に努力し長年にわたり私と同じ境遇の障害者達に対して技術を分け与えたいということです。障害者たちのロールモデルとして私は、歴史に名を残したいのです。そして障害者達にとってバリアフリー環境が実現されるように活動するクリエイターになりたいのです。

最後に申し上げたいことは、障害者はチャンス、機会さえ与えられれば活動を遂行できる者たちであるということです。障害者達の弱点だけを見るのではなく、長所である遂行能力を見てともに一緒になって活動に参加していただきたいのです。ご理解ご協力をいただけるのであれば、私たち障害者達は一般の方々の中に同等の立場で参加でき生活水準も高くなることでありましょう。そしてこの言葉をもって本日お越しくださった聴衆の方々およびすべての日本の方々への締め言葉とさせていただきます。

ありがとうございました。

勝間

ミャッモーさん、どうもありがとうございました。



ミャンマー(ビルマ)における障害者自立支援 Assistance to Persons with Disabilities in Myanmar (Burma)



2008年6月 June 2008

名前: ミャツモー Name: Myat Moe



発表の流れ

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) ミャンマー(ビルマ)の紹介
About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



1) 自己紹介

Self Introduction

<報告の流れ>

- ➡ 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



こんにちは！ Hello!

私の名前は、
ミヤツモー
です。
ミャンマーのヤンゴン市
に住んでいます。

My name is Myat Moe.
I live in Yangon, Myanmar.





障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan



2) ミャンマー（ビルマ）の紹介

About My Home Country

<報告の流れ>

1) 自己紹介 Self Introduction

➡ 2) 出身国の紹介 About My Home Country

3) 私の障害者自立支援活動 My Activities

4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan



ミャンマー基本情報

General Information of the Country



正式名 ミャンマー連邦

面積 約67万8500km² 日本の約1.8倍

人口 4272万0196人(2004年)

首都 ネピドー

民族構成 ビルマ族約70%、シャン族8.5%、カレン族6.2%、ラカイン族4%、華人3.6%、モン族2%、インド人2%、その他。

宗教 仏教(南方上座部仏教、ただし華人は大乗仏教)85%、キリスト教4.9%、イスラム教4%など。

言語 ビルマ語。少数民族はそれぞれ独自の言語を持っている。





Association for Aid and Relief, Japan

ミャンマー国情報 Information of the Country

①ミャンマーの良いところ What I am proud of my country

親切心と助け合いの精神をもつ、笑顔のやさしい社交的な人がたくさん住んでいます。

Myanmar People are kind and willing to help, always having sweet smile and be sociable.

②障害者を取り巻く環境

The environment surrounding PWD in my country

少しずつ改善していますが、特に地方ではまだ差別が残っています。障害者法は現在草案段階で、承認を待っているところです。

The situation of PWDs in Myanmar is improving, but some society people are still having low impression, especially in rural area. PWDs Law is completed as a draft and submitted to Cabinet and waiting to get approval.



3) 私の障害者自立支援活動

My Activities

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
-  3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



私の障害者自立支援活動(1)

My Activities (1)

①活動 Activities

難民を助ける会の障害者のための職業訓練
校で美容理容コースのチーフ講師

Chief Instructor of Hairstyling Class at Vocational Training Center
for PWDs of AAR Myanmar Office

②活動をはじめたきっかけ Reasons of Starting Activities

・ミャンマー(ビルマ)における障害者の経済的・社会的
自立と機会の平等な社会を作りたいと思ったから。

To help PWDs by promoting social and economic independency and to
get equal chance in society.

・障害者が快適に過ごせるような環境を作るため
To achieve the environment where PWDs could live sufficiently.





障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan



私の障害者自立支援活動(2)

My Activities (2)

③活動の課題 Main Difficulties

- ・ 障害者への活動参加の呼びかけがうまくいかないこともある。
- ・ 建物や交通インフラのユニバーサルデザインの推進が難しい。

-Cannot persuade some PWDs to participate in activities.
-Cannot do any environmental changes in society such as infrastructure (building construction) and transportation barriers.



障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan



私の障害者自立支援活動(3)

My Activities (3)

④どのように障害者を取り巻く環境を改善していく予定か What and how I will change the environment surrounding PWDs

- ・ インフラのみならず、社会的にもバリアフリーな環境を実現したい。
- ・ 現在は、ワークショップや社会活動を通じて地域社会の理解を促進している。

-I want to make a barrier free society especially socially.
-I am currently making public talk to improve the community awareness and participating in social activities, etc.



障害者自立支援活動
AAR



Association for Aid and Relief, Japan

私の障害者自立支援活動(4)

My Activities (4)

⑤活動中に勇気付けられたこと What I was impressed or encouraged most in my activities

- ・ 授業や活動を進める中で、自分がかんばることで周りが勇気付けられたり、一緒に活動する仲間から学んだりすることが多い。

I am doing my best always, and others will be encouraged to see me, and vice versa.



障害者自立支援活動
AAR



Association for Aid and Relief, Japan

4) 今後の予定とメッセージ

Plan and Messages

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities

→ 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



今後の活動について

①私の夢 My Dream

- 技術と専門性をさらに磨いて、訓練生へ質の高い授業を長年にわたって提供していきたい。
- 歴史に残る障害者のロールモデルになりたい。
-I wish to be a skillful professional hairstyling teacher who can share the high skill to PWDs in next many several years.
-I wish to be a successful PWD model that left in the history of successful PWDs and to be an idol person for others.



今後の活動について

②会場の皆様へのメッセージ Messages

機会があればできる私たちの長所を見てください。そして、私たち障害者と一緒に手と手を取りあって協力してください。社会の理解と応援を得られたら、とても嬉しく思います。

-Please see our ability and make coordination and cooperation with PWDs. We feel very warmly if we get society's understanding and encouragement.

報告 3：ラオスから (ケンボン・トンシタウン)

勝間 それでは続きまして、ケンボン・トンシタウンさんからご報告いただきます。よろしくお願ひ致します。

ケンボン みなさんこんばんは。今日はこちらに來られましてうれしく思っております。そしてこのような発表をさせていただくことを大変うれしく思っております。

こちらは私の家族の写真です(p.62)。子どもは2人いますがこの写真には、長女の写真は写っていません。その日は、学校に行っていたためです。今日私の発表では、4つのトピックに触れたいと思います。

最初は、自己紹介です。2つ目は、私の母国ラオス共和国について。そして3つ目は、私の活動について。そして4番目は、私の計画・予定とメッセージです。

まず私の自己紹介から始めます。私は、ケンボン・トンシタウンと申します。ラオスの首都ビエンチャンに住んでおります。

私の母国のラオスについてです。これは、ラオスについての基本的な情報です(p.64)。国の正式名は、ラオス人民民主共和国です。面積は、およそ 24 万km²です。人口は、600 万人です。ラオス人民民主共和国の首都は、ビエンチャンです。宗教は、9 割は仏教です。公用語はラオス語です。

これはタルアという記念碑、モニュメントです(p.65)。これは首都ビエンチャンにあります。観光客は皆ここを訪れます。首都ビエンチャンではとても有名です。

これは寺院の写真です(p.65)。首都ビエンチャンにはたくさんの寺院があります。そして、ラオスの人々は皆、仏教の祭典などがある時にはこういった寺院に行きます。

こちらは市場です(p.66)。これはラオスの川の魚ですけれども、皆が至る所からやって来てこの市場で売っています。ほとんどがラオスのものです。これはテーブルクロスです。ラオスの女性の婦人服もあります。

私がラオスに関して誇りに思っているところは、ラオスの文化です。合掌してお祈りをする、そしてみんな一緒になると笑顔でいるというところです。

障害者を取り巻く環境ですが、首都ビエンチャンは問題ありません。障害者との関係に関して問題はあります。しかし一部の地域、例えば地方では障害者の事をよく知

らない人達もいます。そして障害者に対してある種の差別がある所もあります。

次は、私の活動についてですが、現在「ハンディキャップ・インターナショナル・ベルギー」で働いております。私の仕事は障害者の方々のモニタリングそして「Lao Coco Art and Lao Korean Centre」という職業訓練学校での調整作業です。

こちらは Lao Coco Art の写真です(p.68)。訓練生が訓練を受けにやってきます。訓練が終わりますと Lao Coco Art で仕事に就くことができます。

これは Lao Coco の生産物です(p.69)。ココナッツの核をリサイクルしています。

こちらは訓練生の写真です(p.69)。訓練が終わりますと、賞状、それからハンドブックをもらいます。ココナッツの核から製品をどのように作るかという事が書かれたハンドブックをもらいます。

なぜ私がこうした活動を始めたかという事ですが、障害者の人達が職を得て、社会で平等な権利を持つための助けをしたかった為です。

こちらは Lao Korean Centre の写真です(p.70)。障害者の生徒の人達が Lao Korean Centre に訓練を受けにやってきます。彼らに装備、機器を配布して勉強してもらいます。これが私の活動ですが、いろいろと状況に困難を抱えている人に対する支援です。

この人の名前はハッサディーさん、25 歳です(p.71)。首都のビエンチャンに住んでいます。目が不自由な為、支援を必要としています。両親は亡くなっています。兄弟はいたのですが、薬物乱用でどこか別の所に行ってしまったということで、今ビエンチャンで1人で暮らしています。

こちらはコンサバン君です(p.71)。13 歳でビエンチャンに在住しています。障害はポリオです。家族も貧しく父親は亡くなりました。ですから今ビエンチャンで誰かと一緒に住んでいます。教育を受けるために支援を必要としています。

活動中に勇気づけられたことですが、訓練生が訓練を終えた後、仕事に就いて、そして幸せになり、自立した生活が送れるようになることです。彼らの生活の成功を後ろから見守っていききたい。応援していききたいと思います。

最後に私の夢とメッセージです。私の夢ですが、障害者、全ての人達が幸せになり、社会でよき日常生活を送ることができる、そして健常者と社会で良好な関係を持つことができるようになることです。

私のメッセージですが、今日ここにご参加の方々皆が健康で幸せな人生を送り、そし

て成功を収めることをお祈りしています。ご静聴ありがとうございました。私の発表を聞いてくださってありがとうございました。

勝間

ケンボン・トンシタウンさん、どうもありがとうございました。



障害者を助ける会



Association for Aid and Relief, Japan

ラオスにおける障害者自立支援 Assistance to People with Disabilities in Lao PDR



2008年6月 June 2008

名前: ケンポン トンシタウオン
Name: Khemphone THONGSYTHAVONG



障害者を助ける会



Association for Aid and Relief, Japan

発表の流れ

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) ラオスの紹介 About My Home Country : Lao PDR
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



1) 自己紹介

Self Introduction

<報告の流れ>

- ➡ 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



こんにちは！ Hello!

私の名前は、
ケンポン トンシタウオン
です。

ラオスに住んでいます。

My name is
Khemphone THONGSYTHAVONG
I live in **Laos**.





2) ラオスの紹介

About My Home Country: LAO PDR

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
-  2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



ラオス基本情報

General Information of the Country



正式名: ラオス人民民主共和国

面積: 約24万km²

人口: 580万人(2006年)

首都: ビエンチャン

宗教: 仏教

言語: ラオス語

出展: 外務省ホームページ







ラオス国情報 Information of the Country

②障害者を取り巻く環境

What is the environment surrounding PWD in your country?

ビエンチャン＝みんな助けてくれる

地方＝障害のことを知らない人がある

Vientiane=Good relationship

Rural Area=Some people don't know People with Disability well.



3) 私の障害者自立支援活動

My Activities

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- ➡ 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan



私の障害者自立支援活動(1)

My Activities (1)

①活動 Activities

障害者のための職業訓練校で、
障害者の評価と関連施設の調整

Monitoring of people with disabilities and coordination with Vocational training institutions (Lao Coco Art and Lao Korean Centre).







私の障害者自立支援活動(1)

My Activities (1)

②活動をはじめたきっかけ

Reasons of Starting Activities

障害者の人たちが職を得て、自立して
生活する手助けをしたかった。

I want to help PWD to get a job and have equal right to live in society





障害者を助ける会
AAR Japan

Association for Aid and Relief, Japan



私の障害者自立支援活動(2) My Activities(2)

個人への支援

Assistance to person who face to difficult situation.

- ・ **ハツサディーさん、25歳。
ビエンチャン在住**

Her name is Hatsadee, 25 years old,
she lives in Vientiane

- ・ **目が見えないため、不定期で支援をしている。**

She needs help because of blindness



障害者を助ける会
AAR Japan

Association for Aid and Relief, Japan



私の障害者自立支援活動(3) My Activities(3)

個人への支援

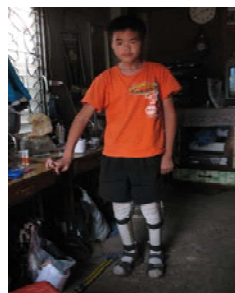
Assistance to person who face to difficult situation.

- ・ **コンサバン君、13歳、ビエンチャン在住**

His name is Khonesavanh, 13 years old, he lives in Vientiane.

- ・ **ポリオの後遺症で両足に障害がある。**

His disability is due to Polio





私の障害者自立支援活動(4)

My Activities (4)

③活動中に勇気付けられたこと

What were you impressed or encouraged most in your activities?

**職業訓練を終えた障害者の人たちが、
就職先を見つけられたときです。**

To see trainees to get jobs after finishing the trainings and they become happy and have a good daily life. I like to stay behind the success in their life.



4) 今後の予定とメッセージ

Plan and Messages

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
-  4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



障害者支援活動の会
障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan



今後の活動について

①私の夢 My Dream

全ての障害者の人たちが幸せになること

My dream is to see all people with disabilities happy and have good daily life in society.

②会場の皆様へのメッセージ Messages

皆様が健康で幸せな人生をおくるのを祈っています。

I wish all of participants a good health and happiness.



報告 4：ラオスから (シリソンスック・スンダラ)

勝間 同じラオスからいらっしゃいましたシリソンスック・スンダラさんをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

シリソンスック 皆様こんにちは。発表を始める前に、まず「難民を助ける会」にお礼を申し上げたいと思います。またアクセンチュアにもお礼を申し上げます。今日発表する機会を与えてくださった事、大変感謝しております。

シリソンスック・スンダラと申します。ここで 10 分ほど発表させていただきます。発表は 4 つの部分からなっております。まず自己紹介を致します。それから母国ラオスの紹介。そして私の活動、そして最後に今後の夢とメッセージという事でお話し致します。

シリソンスック・スンダラと申します。ラオスからまいりました。現在は日本の新潟県の国際大学で勉強をしております。日本に来る前はフランス大使館の経済貿易部で仕事をしていました。また、障害を持つ子ども達のための小さな施設を運営しております。

ラオスの写真。ケンポンさんのほうのプレゼンテーションで既にご覧いただいたかと思います。こちらは戦勝記念碑です(p.80)。首都ビエンチャンを訪れますとこれが非常に目立つ所に建っております。フランス建築の影響を受けております。以前、ラオスはフランスの植民地でしたので、その影響があるわけです。パリの凱旋門との類似性に気付かれる方もいらっしゃるかと思います。

これは、首都の中の幹線道路の 1 つであります(p.80)。ここに写っている乗り物ですがトゥクトゥクという乗り合い自動車でありまして、ラオスではよく見られます。ラオス版のタクシーという事になりましょう。

首都ビエンチャンでの市場の様子です(p.81)。ここで食事をとることもできます。このプラスチックの袋の中には、ナンバンというデザートの材料が入っています。その主たる材料はココナッツミルクで非常に甘いデザートとなります。

私はラオスという小さな国から来ております。ラオスという国は人びとの親切さ、素朴さ、そして団結力で説明できると思います。それについては大変に誇りをもっております。しかしながら障害者をめぐる状況というのは非常に厳しいものがあります。人材また予算の制限から、提供できるケアサービスが非常に限られております。

障害者に関する私自身の活動ですが、脳性まひの子ども達の施設を設立し運営しております。脳性まひというのは一種の精神障害で、身体障害につながるものでもあります。なぜこのような活動を始めたのかという事ですが、自分の小さな息子が脳性まひを患っているからであります。ラオスにおいては息子が必要としているケアを受けられる制度が何もなかったという事で自ら活動に乗り出しました。

私どものセンターでの活動の様子であります(p.83)。これは音楽療法のセッションを示しております。写っているのはクリストフさんです。フランス人のボランティアです。子ども達一人ひとりに楽器を演奏できるように教えています。そしてみんなで楽しく一緒に演奏して、お互い支え合う事ができるようにという事で教えているわけです。

これは理学療法のセッションの様子であります(p.83)。家族もその支援に参加できます。ここに写っている小さな子はティノ君です。ティノ君はまだ自分では歩くことができません。そこで彼の歩行能力を強化するためのプログラムを策定して、歩行練習に取り組むようにしております。正式な事業以外での場面でも、センターの先生は一人ひとりの能力に合わせて教えています。また各生徒の教育プログラムに沿って教育を行っています。これは入所した時に最初にプログラムを設定して、それに基づいて行うというものであります。デイケアですが、まず午前7時30分に生徒達が到着します。おやつ、お昼を与えてそしてお風呂に入れて、本を読み聞かせて、その後お昼寝という事になります。

この分野で仕事をしてきて、なかなか目標を達成できないという問題を体験しています。それは、現地スタッフの能力が限られていること、また予算が非常に不足していることが主たる理由であります。

障害を持つ子ども達が置かれている環境を変えるために、スタッフや家族に訓練するような施設を作りたい。そして訓練を受けた人達が、子ども達を支援できるようにしたいと考えております。

我々のケアを必要としている子ども達から私は勇気をもらっています。また努力を続けるスタッフの熱い思いにも勇気づけられています。また、こういった新しい施設が今後設立できるかもしれないという、その可能性も私を駆り立てます。

私の夢ですが、子ども達が精神的、肉体的に発達して、社会の中で家族と共に幸せな生活ができるということであります。全く障壁なく社会の一員となって幸せな生活ができるということが私の夢です。

ここで子ども達の家族と話をしています。これまでの活動について話し合っているわけです。センターでの教育が、どれぐらい効果的であったかという事を家族と共に振り返っているわけです。そして、この次にどういう事をしていこうかとお互いに話し

合っています。3ヶ月ごとに、こういった話し合いを持っております。

最後になりましたけれども、我々1人1人が思いやりをもって、努力を傾注して、様々な活動に参加して、弱い立場にいる子ども達を支援していくという事を呼びかけたいと思います。ご清聴ありがとうございました。ご質問があれば後ほどの質疑応答の時間にお答えしたいと思います。ありがとうございました。

勝間

シリソンスック・スンダラさん、どうもありがとうございました。



障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan



ラオスにおける障害者自立支援 Assistance to People with Disability in Lao PDR



2008年6月 June 2008

名前: シリソンスック・スンダラ

Name: Sirisomsouk SUNDARA



障害者を助ける会

Association for Aid and Relief, Japan



発表の流れ

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) ラオスの紹介 About My Home Country : Lao PDR
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



1) 自己紹介

Self Introduction

<報告の流れ>

- ➡ 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



こんにちは！ Hello!

私の名前は、
シリソンスック スンダラ
です。

ラオスから来ました。
今は日本の新潟で勉強しています。

My name is

Sirisomsouk Sundara

I came from Laos.

Now I'm studying in Nigata, Japan





2) ラオスの紹介

About My Home Country: LAO PDR

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
-  2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



ラオス基本情報

General Information of the Country



正式名: ラオス人民民主共和国

面積: 約24万km²

人口: 580万人(2006年)

首都: ビエンチャン

民族構成: 低地ラオ族(60%)、その他




宗教: 仏教

言語: ラオス語

出展: 外務省ホームページ





障害者支援活動部 AAR 障害を助ける会
Association for Aid and Relief, Japan

ラオス国情報

Information of the Country

①ラオスの良いところ What can you be proud of in your country?

親切で思いやりがあり団結しているところ




Kindness・Simplicity・Solidarity of people

②障害者を取り巻く環境

What is the environment surrounding PWD in your country?

予算と人が不足しており、障害者へのケアが充分ではない。

Limitation of care service for PWD, Because of budget limitation and shortage of human resources.






障害者を助ける会
Association for Aid and Relief, Japan


3) 私の障害者自立支援活動

My Activities

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- ➡ 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



障害者を助ける会
Association for Aid and Relief, Japan


私の障害者自立支援活動(1)

My Activities (1)

①活動 Activities

脳性マヒの子どもたちの施設設立と運営

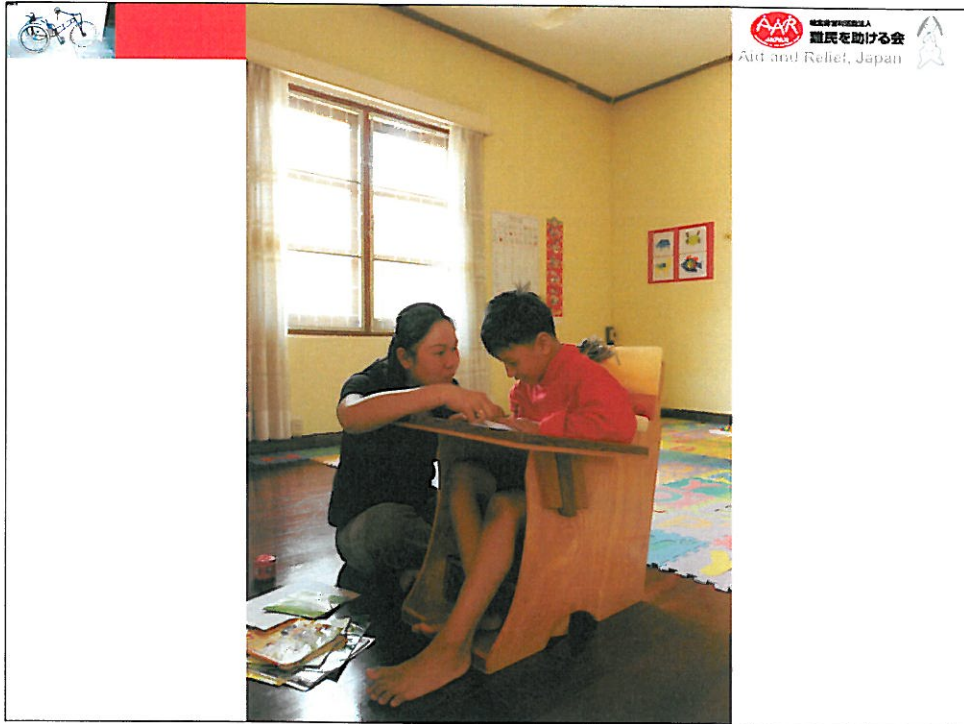
Establish and manage a small center for child with cerebral palsy.

②活動をはじめたきっかけ Reasons of Starting Activities

私の息子が脳性マヒでラオスに施設がなかったため

My son had cerebral palsy, but there was no center for him in Lao PDR.







私の障害者自立支援活動(2)

My Activities (2)

③活動の課題 Main Difficulties

障害者支援のための資金が政府にはほとんどなく、
専門的知識を持った人材があまりいない。

Country is lack of technical expertise of local staff, limitation of financial resources.

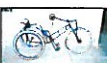
④障害者を取り巻く環境をいかに改善していくか

What and how will you change the environment surrounding PWDs?

脳性マヒの子どもたちのための施設設立

スタッフと両親へのトレーニング

Found the institution providing more trainings for staff and families to take care of child.



私の障害者自立支援活動(3)

My Activities (3)

⑤活動中に勇気付けられたこと

What were you impressed or encouraged most in your activities?

➤ スタッフの熱い思い

➤ 大勢の子どもたちが
私たちの支援を必要としていること

The children who really need appropriate care, spirit of staff who are willing to keep going the project and the potential of possibility.



公益財団法人
難民を助ける会
Association for Aid and Relief, Japan



4) 今後の予定とメッセージ

Plan and Messages

<報告の流れ>

- 1) 自己紹介 Self Introduction
- 2) 出身国の紹介 About My Home Country
- 3) 私の障害者自立支援活動 My Activities
- ➡ 4) 今後の予定とメッセージ Plan and Messages



今後の活動について

①私の夢 My Dream

障害に関係なく

子どもと家族が将来に希望を持ってること

Children move forward in their mental and physical development in joyful life style with their families in the society without any barrier for them to be part of society.

②会場の皆様へのメッセージ Messages

弱い立場にいる子どもたちのために

皆様の力をかしてください

Express your own compassion and put your own effort to promote together

care system by participating in any relative activities to help these vulnerable children



ご静聴ありがとうございました。

コメンテーター

土橋 喜人

国際協力銀行（JBIC）

勝間

それでは4人からのご報告を受けまして、コメンテーターとしてお迎えした土橋さんをご紹介します。土橋さんは、お手元の資料に経歴が書いてございますが簡単にご説明いたしますと、民間銀行でのご勤務を経て、青年海外協力隊の村落開発普及員としてフィジーで活動を展開されました。その後、国際協力銀行（JBIC）に入行されまして、開発セクター部において社会開発班のメンバーとして、社会開発の視点から業務支援を行っていらっしゃいます。ちなみに土橋さんが所属するJBICのODA部門は、10月1日に国際協力機構（JICA）と統合いたします。それでは土橋さん、よろしくお願いいたします。

土橋

ただいまご紹介にあずかりました土橋と申します。ちょっと座ってお話をさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。もう既に途上国の障害者がどのような状況にあるのかという事は力強いメッセージを4人の方からいただいたので、私の方からはコメントというよりも途上国の障害者の人達への支援はどのようにしていったらいいのか、どのようにしているのかというドナーの視点から、どういうアプローチが可能なのかという事について簡単にお話させていただければと思います。時間の制約もありますので、かなりはしょってお話しますが、私が『アジア研ワールドトレンド（2008年6月号）』というところに書きました論文をお持ちしました。今日、コピーを配っているかと思いますので、詳しくはそちらを見ていただければと思います。

世界の潮流ですけれども、今、世の中どういう風に障害者支援に対して動いているかという事については詳しい話はもう、中西さんの基調講演でお話いただいたと思いますので、私の方からさらりとだけお話いたします。権利条約があるという事はみなさんお分かりになったと思います。その中では国際協力に関する条項というのにも明記されております。ですので、様々なドナーというのは政策とか支援の中に、そういった事を考えていかないといけないというような状況にあります。

そういった取り組みについて各ドナーもいろいろと取り組みを行っており、特にアメリカの米国国際開発庁（USAID）という所がありますけれども、そこでは明確に障害者に対する支援を行っていくという事を政策として謳っております。また、いろいろなドナーの中でも様々な部署というものを設けて、担当官を置いたりして、そういった取り組みに対していろいろな援助機関が取り組みを行っております。また特に世界銀行などは非常にリーダーシップをとってやっておりますけれども、「障害と開発」室というものを設けましてそこを中心に Global Partnership for Disability and Development

(GPDD) と呼ばれるイニシアチブを立ち上げて、いろいろな援助機関、途上国政府、NGO、障害者当事者団体、等といった様々な分野の人達のネットワークを作ったりしています。

そういった中でどういった支援を実際に行っているのかというところですが、支援のアプローチとして大きく分ければプロジェクトを支援する方法、それと政策を支援する方法があるかと思います。そしてプロジェクトの中でも2つほどあり、まず1つめのタイプとしては、プロジェクトの中で先ほど皆様の中からお報告がありました職業訓練であるとか、自立生活であるとか、そういったものを直接的に支援するプロジェクト型のものがあります。

それと2つめのタイプとしては、普通の開発プロジェクトの中に障害者の視点を入れていく、障害者の人達も一緒にプロジェクトの中にインボルブしていく、一緒にやっていく、という視点。メインストリーミングと呼ばれていますけれども、そういったようなアプローチをとっている方法。

そして政策を支援する方法として、先ほども障害者政策、障害者の法律を作っていくというお話がありましたけれども、そういったものをサポートすることがあります。例えば、世界の中で PRSP という貧困削減戦略ペーパーというものを各途上国で作っています。その中に障害者の視点も盛り込んでいくと、そういうような支援も考えられます。

また、支援のチャンネルといたしましても様々なものがあります。先ほど国連 ESCAP の話が出ましたが、そういった国連の国際機関を通じた支援を行っていく。あるいは私がおります国際協力銀行は日本政府の援助機関ですが、こういったような Bilateral、二国間援助の機関を通じた支援を行っていく。あるいは、例えば今日の主催は AAR という NGO ですが、NGO を通じた政府の支援というものも特に欧米では盛んに行われておりますので、そういった支援を行っていく。また同時に途上国同士、南南協力と呼ばれているものがありますけれども、そういった形での支援もあります。

日本における取り組みがどうなっているかという事ですけれども、日本の ODA というのは大きく分けると二国間援助と国際機関を通じた援助があります。二国間援助の中には技術協力、無償協力、有償協力というものがあります。私のいる国際協力銀行というのは、その中でも有償協力、お金を貸して返してもらうというような協力を行っております。そういった中で日本における障害者の支援がどのようになっているかというところですが、日本の政府開発援助 (ODA) ですが、その大方針を定めているのは ODA 大綱というものです。それが 1992 年に制定された時には「障害者支援」というのが明確に書かれていました。これが 2003 年になって新しい ODA 大綱になりました。その中には障害者という言葉は出てきません。ただし、それは「脆

弱な人々」という事の中に含まれるというのが政府の解釈であり、それを今も政府のいろいろな開発援助の中で生かそうとしているところであります。

国連障害者の権利条約については、先ほど冒頭の講演で中西さんからお話がありましたけれども、日本は条約に対して署名はしております。今後、批准に向けた動きを行っているというところでございます。特に「びわこミレニアムフレームワーク」、BMFと呼ばれるものについても中西さんのほうからお話がありましたが、びわこと言われるだけあって、これは日本政府がいろいろ支援をしていった中でできあがった 1 つの枠組みなのかな、という風にも思っております。

また実際の援助の実施機関である JICA ではエンパワーとメインストリーミングの推進、あるいは私のいる JBIC では特にインフラにおけるバリアフリー化といったものを推進しております。

このパワーポイントの図(p.96)は JICA のアプローチですけれども Twin-Track Approach と呼ばれているものです。エンパワーメント、障害者に直接援助・支援を行う。それをメインストリーミングは通常の開発プロジェクトの中に障害者の視点を盛り込んでいって、障害者の支援を行う。この両方が大事だという事は JICA できっちりやっておりますし、世界の援助機関でもこのようなアプローチをとっているところが多いです。

私のいる国際協力銀行（JBIC）はどのようなサポートをしているかという事ですけれども、障害者には 4 つのバリアがあると言われております。それは冒頭の講演の中でも中西さんがおっしゃっていましたが、物的なバリア、制度上のバリア、情報のバリア、社会的なバリアというものがあります。

その中でも特に日本における障害分野の強みというのは、この物的バリアを取り除いていくという所にあるのかな、と私は強く感じておりますし、またいろいろな研究者に聞いてもそういうような声が非常に多いです。皆様も例えば、先ほど中西さんのお話の中でエレベーターのお話が出ましたけれども、それが今、あちこちの駅で取り付けが行われたりしております。また、点字タイルなんかは日本が世界で初めて始めた視覚障害者への支援の 1 つになります。

一方、私がいる国際協力銀行というのは円借款事業を行っているというお話を先ほどさせていただきましたが、非常に大きなインフラ事業をサポートしております。大体 1 件あたり 100 億円くらいです。非常に大きな金額を扱っております。ですので、日本の障害分野の強みを活かして、そういったインフラ事業、例えば公共施設ですとか鉄道などの公共交通機関といったものをつくったりしていますけれども、そういったものに対してバリアフリーの視点、ユニバーサルデザインの視点を盛り込んでいくことによって、いろいろな取り組みができるのかなということで推進しています。社会

にどんどん出ていくという重要性については、例えば先ほどアフガニスタンのアジズさんとかもお話しをされていたかと思います。そういったような、世の中に出ていくインフラを整備していくという事で、障害者の人達が社会に出て行く。その事によって社会がどんどん変わっていくという、その事に対して若干ながらサポートしていくという事が可能なのかな、という事で取り組みを推進しております。

その中で事例としては、例えばタイのバンコクなんかでは、非常に良いと言われているプロジェクトをやっております、バンコクの地下鉄は非常にバリアフリー、ユニバーサルデザインの視点がたくさん入った事業を行っております。

また、インドのデリーにあります地下鉄の事業でも、ここに写真で写っておりますけれども(p.98)、こういった車いすの方達、障害者の方達とも十分に協議をしながらプロジェクトを進めていきました。このような手法というのは実は日本で行われており、例えば、中部国際空港、あるいは福岡の七隈線という地下鉄での取組の好事例があります。それらを含めて様々な所でも、こういった手法でやっております。障害当事者の方達の声をちゃんと聞いてプロジェクトに生かしていくという事が非常に大切な視点なのかと思います。

実際に、その他にどうやったらこういったプロジェクトが良くなるか、こういったサポートが可能なのかなんですが、例えばこれは、私どもの JBIC で去年、ベトナムにおいて行ったセミナーの様子をお伝えしております(p.99)。ここには政府の関係者、障害当事者の方達、それと他のドナーの方達を呼んで一同に協議する場を設けました。こういった事をする事によってお互いにお互いの事情をわかるようになっていく。そういった事を通じて、障害者の実情というものがどんどん政策に反映されていくという事が可能になるのかと思います。

また、これは JICA でやっているアジア太平洋障害者センター (APCD) というプロジェクトがあり、そのセンターがタイのバンコクに建設されております(p.99)。今、第2フェーズ、第2期のプロジェクトのフェーズに入っております、アジア太平洋の広域の障害者の方達に対して、タイのバンコクの研修施設で研修を行う、あるいは専門家を途上国の方に派遣して南南協力と呼ばれるようなものを行っていく、そして情報収集・蓄積・発信を行う、というプロジェクトを行っております。

そういった事を進めていく上で非常に大事なのが、他のドナー、他のステークホルダーの方達との協議です。例えばこの写真なんかは、世界銀行の方達と我々が協議をした時の写真です(p.100)。ここに写っているジュディー・ヒューマンさんは中西さんとは何十年前前からお付き合いのある方で、アメリカの障害者のリーダーのお1人で、この間まで世銀のアドバイザーをしておりました。後、右下に写っている本は外務省が FASID というところに委託して作った報告書になります。ここには私と基調講演をされた中西さんも書いています。Web からもダウンロードできますので、今日の私の

話が分かりにくいという方はこれをぜひ読んで下さい。

また、そういったような取り組みを推進していく、お互いのことを良く分かるようにしていく為に、世界銀行東京事務所および、AAR も参加している JANNET という NGO の連絡会が共催で月に 1 回ほど、世界銀行の東京事務所、これは日比谷公園の真ん前にありますけれども、そこでコーヒアワーという 20〜30 人が集まってやるセミナーを開催しております(p.100)。このような取り組みに途上国の障害者の人を呼んで、途上国の実情を知っていく取り組みも行っております。この写真に写っております森壮也さんというのは、ここの早稲田大学の卒業生の方で、アジア経済研究所という所で研究員をされております。この方が「障害と開発」というメーリングリストを立ち上げて途上国の実情というものを発信しております。ご関心のある方は今日のチラシの中にも入っておりますので、ぜひこのメーリングリストに参加して下さい。また、このコーヒアワーについては今日のチラシにもありますが、来週の火曜日にイベントがありますので、ご関心のある方はぜひいらして下さい。また AAR も参加されている JANNET という障害分野の NGO の連絡会があります。こういったような NGO との連携を通じていろいろな情報を収集するようにしておりますし、そういった協議が大事だと思っております。

かなり早口で話をしてしまいましたけれども、そういったような形で途上国の実情を知る、障害者の人達とのコミュニケーションをとっていく、そういうような所を通じてどのような在り方が、いい支援になるのかという事を考えていくことが非常に大事だと思います。例えば今日の場合なんかは、産業界、アクセンチュアの民間企業の支援をいただいている。学校、ここ早稲田大学で行っている。さらに AAR という市民社会 NGO の人達が参加している。そして、私は一応公的セクターから来ている。こういったような 4 つのセクターからいろいろな人達が来て、いろいろ協議をしていくという事は非常に大事だと思いますので、そういったプロセスを通じて、先ほど皆さんがおっしゃっているような幸せ、みんながハッピーになっていくような世界をつくっていければな、と思っております。という事で、かなり走ってしまいました、私のコメントとさせていただきます。どうもありがとうございました。

勝間

土橋さん、時間の無い中に非常にたくさんの情報を詰め込んでくださってどうもありがとうございました。それでは、ここで報告とコメントを終わらせていただいて、パネルディスカッションに移りたいと思います。これから少し会場に机を持ってきますので、数分お待ち下さい。

この間、少し私の方で今の議論を振り返りたいんですが、最初に「難民を助ける会」という NGO の活動のお話がありましたし、そして今の土橋さんからですね、政府開発援助、国際協力という形で公的セクターがこういった活動ができるか、そして私達が参加できるような最初の一步はどこに踏めばいいのかという事で、いろんな勉強会の機会があるというお話がありました。

先ほど、学生というのは出てこなかったんですが、ここには早稲田を含めて学生のみなさんもたくさんいらっしゃると思いますので、学生のみなさんがですね、最初の一步を踏むにはどこで、どういった勉強ができるのかということにも触れていただきました。土橋さんの論文については、非常に売れ行きが良くて品切れになってしまったようなんですが、「難民を助ける会」の事務局にお知らせいただければ土橋さんの論文をお送りいただけるということですので、是非ともご連絡ください。

また先ほど **FASID**、国際開発高等教育機構の略ですが、そのホームページにいきますと、今の土橋さんがお話くださった **FASID** の小冊子がダウンロードできるようになっておりますので、それを見て頂くことも可能だと思います。

AAR国際人権シンポジウム
「途上国に生きる障害者の現状を知っていますか？」
途上国における障害者の人権～障害を持つ人びとの自立支援を目指して～

**コメント(Comments):
ドナーの取組(Activities of Donors)**

2008年6月17日
国際協力銀行開発セクター部
社会開発班調査役
(Social Development Division, Sector Strategy Development
Department, JBIC)
土橋喜人 (Yoshito Dobashi)

1

1.世界の潮流 (World Trend)

- 権利条約 (Convention of the Rights of Disabled People): 国連障害者の権利条約(2006年12月採択、2008年5月発効)には「国際協力」に関する条文あり(第32条)
- 政策(Donor's Policy): USAIDには障害と開発に関する明確な政策有、他のドナーは社会保障や社会保護の政策の中に包含(公式な政策とはなっていないても様々な形で推進)
- 体制(Departments/Sections of Donors): 多くのドナーが障害と開発に関するスタッフや部署を設置
- パートナーシップ(Partnership): 世界銀行本部「障害と開発」室におけるGPDD(Global Partnership for Disability and Development)等

2

支援方法(Methods of Supports)

(1)支援アプローチ(Types of Approaches)

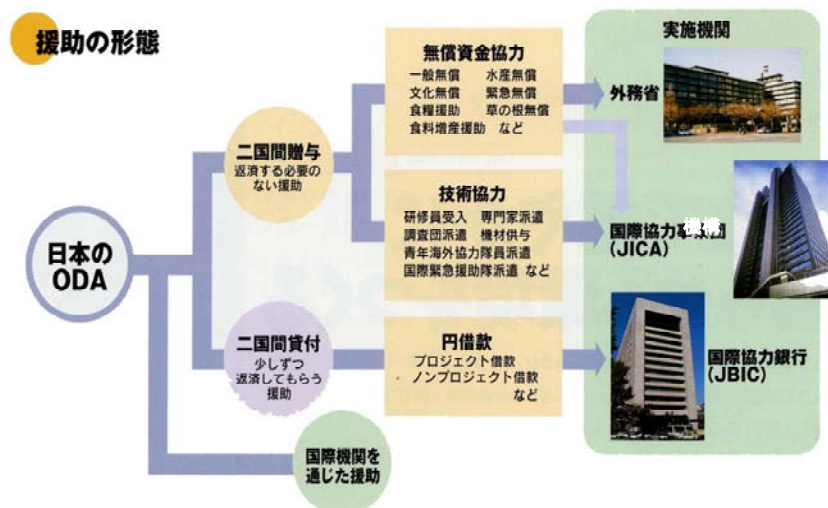
- ①プロジェクト型(project-type; empowerment): 障害者支援を主目的としたもの: リハビリ施設、職業訓練、障害者当事者団体支援、CBR、IL、等
- ②プロジェクト型(project type; mainstreaming): 障害者支援を配慮事項としたもの: インフラ事業のバリアフリー化、等
- ③政策支援型(policy support): PRSP策定時の途上国政府との協議、途上国障害者政策支援、等

(2)支援のチャンネル(Channels of Approaches)

- ①国連(UN)等の国際機関を通じた支援: 主に北欧諸国
- ②二国間援助(Bi-lateral)を通じた支援: 保健・教育案件など
- ③NGOを通じた支援: 主に欧州、北米
- ④南南協力(South to South): 途上国間の協力

3

2. 日本における取組 (Japanese Approach) 我が国経済協力におけるODA

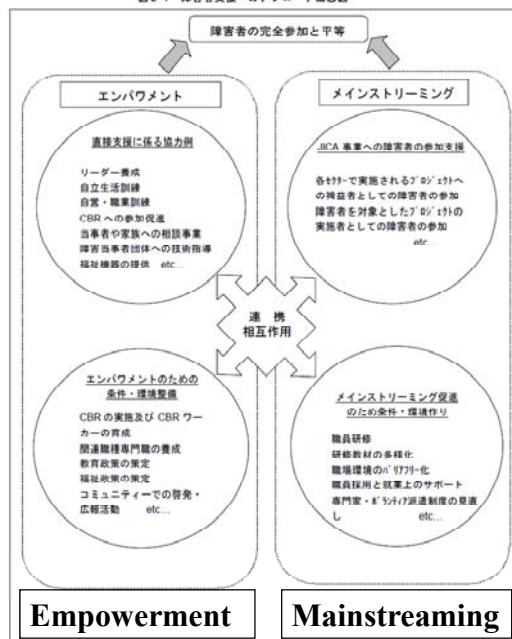


2.日本における取組: 障害者への支援(Support to Disabled People)

- ・ 旧・政府開発援助大綱(ODA大綱)(ODA Charter)
(1992):「障害者の支援」を明記、現行のODA大綱(2003):
人間の安全保障における脆弱な人々(Vulnerable People)
に該当:FASID委託調査
<http://www.fasid.or.jp/chosa/kenkyu/ngo/index.html>
- ・ 国連障害者の権利条約(Conventions of the Right of
Disabled People): 日本政府は2007年9月に署名済(批准
は未済)(Signed but not yet ratified)
- ・ UNESCAP:びわこミレニアムフレームワーク(Biwako
Millennium Framework (BMF))(2002)
<http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/intl/bf/index.html>
- ・ JICA:エンパワーメントとメインストリーミング(Twin-Track
Approach; Empowerment and Mainstreaming)
http://www.jica.go.jp/infosite/issues/social_sec/04.html
- ・ JBIC:特にインフラ事業におけるバリアフリー化/UD化の
強化(Barrier-free/Universal Design)

5

図2-1 障害者支援へのアプローチ概念図



JICA:課題別指針

・障害者支援

(Thematic Guideline
for Support on
Disabled People)
(p.21)

<http://www.jica.go.jp/global/disability/report/word/001.doc>

6

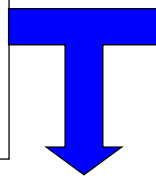
3.JBICにおける障害者支援の取組 (Support of JBIC)

- 障害者の4つのバリア;
 - ①物的バリア(生活環境等)(Physical Barrier)
 - ②制度上のバリア(法律等)(System Barrier)
 - ③情報のバリア(視覚障害・聴覚障害のある人への情報提供等)(Information Barrier)
 - ④社会的なバリア(差別・偏見等)(Social Barrier)
- 日本における障害分野の強み;ユニバーサルデザイン(バリアフリー)による生活環境の整備
(Barrier-free/Universal Design)

7

3.JBICにおける障害者支援の取組 (Support of JBIC)

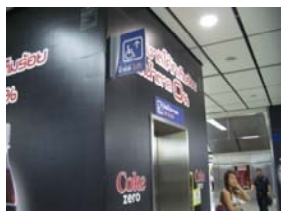
日本における障害分野の強み
;ユニバーサルデザイン
(バリアフリー)に
よる生活環境の整備
(Improving barrier-free
environment)



円借款事業:
インフラ事業への
支援が多くを占める
(Mostly financing
infrastructure projects)

JBICの障害者支援の取組における強み
=インフラ事業(とくに公共交通機関および公共施
設の事業)での適用におけるユニバーサルデザ
イン(バリアフリー)の取組
(Introducing Concept of Barrier-free/Universal
Design into Infrastructure Projects)

円借款プロジェクトの配慮事例：
タイ・バンコク地下鉄事業
(Bangkok Metro Project in Thailand)



- ・タイ・バンコク地下鉄事業におけるユニバーサルデザイン(バリアフリー)の導入
- ・バンコク地下鉄の実施機関職員
⇒JICAのプロジェクト(APCDプロジェクト)でトレーニング

9

円借款プロジェクトの配慮事例：
インド・デリーメトロ事業
(Delhi Metro Project in India)



©アマル・ウジャール紙サンジェイサカリヤ氏



- ・インド・デリーメトロ事業におけるユニバーサルデザイン(バリアフリー)の導入
- ・国内の障害当事者団体とのコンサルテーションを実施

10

4.推進のための方法(Approaches to move forward) :

(1)技術協力・知的支援(Technical Support) :

(例)JBICによる「ベトナムにおけるユニバーサルデザインのセミナー」開催



2007年7月に、ハノイ市とホーチミン市において、政府関係者、実施機関、障害当事者団体、有識者、他ドナー等を対象に、交通セクターのユニバーサルデザインのセミナーを実施。

11

4.推進のための方法(Approaches to move forward) :

(2)技術協力・知的支援:他ドナーとの連携

(Technical Support in cooperation with JICA) :

(例)JICA/APCD研修への参加

JICAの支援によってタイにアジア太平洋障害者センター(Asia Pacific Development Center on Disability: APCD)が設立。現在は第二フェーズ(2007-2012)。アジア・太平洋の障害者支援に係る研修や情報発信などを行っている。



©APCD



©APCD

障害当事者、行政官、技術者の様々な分野の人々が参加して研修を受講。

円借款事業の実施機関も複数国から参加(2007年12月)。

12

4. 推進のための方法

(Approaches to move forward):

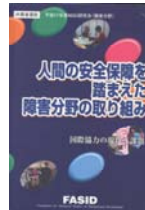
(3) 様々なステークホルダーとの協議

(Discussion with various stakeholders)



世界銀行の障害と開発
アドバイザーとの協議お
よび共催セミナー実施
(2005年11月)

FASID-NGO研究会(障
害分野)への参加(2005
年度):「人間の安全保
障を踏まえた障害分野
の取り組み」



13

4. 推進のための方法

(Approaches to move forward):

(4) 各種セミナー等の開催(seminars): 他ドナーとの連携

(例) 世界銀行東京事務所の取組



2006年12月に、バングラデシュの
NFOWDのアラム会長のセミナーを
世界銀行東京事務所で実施。
JBICも連携して協力。
このコーヒーマーは現在は「障害と
開発」としてシリーズ化



©世界銀行東京事務所

アジア経済研究所の森壮也研究員も
発表(2007年1月)
森研究員は、「障害と開発」のMLも主
宰(希望者は同氏まで申し込
み: soya_mori@ide.go.jp)

14

4. 推進のための方法(Approaches to move forward) :

(5) 各種セミナー等の開催: NGOとの連携 (例) JANNET(障害分野NGO連絡会)の取組



JANNET事務局である日本障害者リハビリテーション協会が2007年2月にバングラデシュとインドから現地NGO関係者を招聘し、セミナーを実施。JBICは同セミナーの後援団体となった。

<http://www.normanet.ne.jp/~jannet/>

勝間 それではパネルディスカッションに移りたいと思います。皆さんここまで辛抱強く聞いていただきましたので、会場の方からの質問を受け付けたいと思います。会場の都合もありますので、何人かの方からいくつかの質問を受け付けて、パネリストの方にはまとめて一度にお答えいただくと、そういう風にしたいと思います。質問される方には、お名前とご所属を簡単に教えていただいて、できるだけ短い、簡潔な質問をお願いしたいと思います。

それでは、まず質問したいという方、挙手いただけますか。はい。お1人。はい、お2人目。他には、はい、3人目。それではこの3人の方にご質問していただきたいと思っています。それでは最初の方、よろしくお願いします。

質問1 かつて JICA で専門家なんかで活動した経験があります。

私の質問は、今回いろんな方からドナーの活動であったり、NGO の活動であったり、いろいろな情報を得たんですけれども、やっぱりその中で欠けているのは、途上国政府がどういう風に取り組んでいるのかというところが、なかなか見えてこなくて。途上国政府が、今どういう風に動き出してこの問題に対応しているのか。その中で例えば、グットプラクティスがあれば教えて欲しいなど。あと逆に全く全然やってないというのが現状だとか、そこら辺のところを教えてもらいたいなと思います。

勝間 はい。どうもありがとうございました。それでは2人目の方。3番目の席の男性の方、よろしくお願いします。

質問2 よろしくお願いいたします。仕事は株式会社に勤めております。伺いたいのは1つ目はまず、社会的なバリアというお話しがございましたけれども、それは今無くなっていきつつあるのか。大変な問題だと思います。バリア、障壁という事は私達にとっても大変な問題だと思うのですが。法律ですとか、条約ですとか、そういったものがなかなか決められなくて進んでいかないという現状があると思います。気持ちとしては分かるという事と、条約をきちっと決めていくとか、法律を決めていくことは違うと思います。今の若い方達を見ていると、社会的な活動に関心が無いというか、私の世代とは気持ちがずれている、違っている感じを受けてしまうんですが。そういったあたりの事も皆さんに伺いたいなと思っております。よろしくお願いします。

勝間 はい。どうもありがとうございました。3人目のご質問ということで、女性、後ろから4番目でしょうかね。

質問3 ワールド・ビジョン・ジャパンという NGO に所属しております。中西さんのご協力をいただいてウズベキスタンの方でプロジェクトを始めています。先ほどアジズさん

のほうからアフガニスタンでの文化の障壁というお話があり、それと同時に人々の障害への関心が高まらなければ、結局障害を持っている方々の方が変わってしまうかもしれないという事を学んでいるんですけれども、それについて社会への働きかけという事について具体的にどんな形でやっていけばいいのか、という事にコメントをいただければと思います。

勝間 はい。どうもありがとうございました。それではですね、最初のご質問の、途上国政府はどういった役割を果たしているのか、どういう取り組みを進めているのか、またグッド・プラクティスにはどういったものがあるのか、といったことですが、これには中西さんにお答え頂いてよろしいでしょうか。

中西 中西由起子です。最後のグッドプラクティスを、というところで悩んでしまって、さっきからずっと考えていたんですけれども。ある意味でのグッドプラクティスは、途上国の場合ではさっき条約のところでもお話したように何の法律もできていなかったもので、条約を受け入れ易いという点に関連します。例えば国連がなんとかしたという、結構それは政府が自ら先頭に立って実施しようとしします。例えば12月3日は国際障害者の日です。残念ながらこの日に関しては、日本では既にそれが決められた段階で12月9日が障害者の日として決まっていたので、今さら12月3日？という雰囲気がありました。そのため妥協策として、3日から9日まで、日本は一週間を障害者の週間としてやるという形で落ち着いています。まあでも、しかしながらメインは未だに12月9日辺りになっているんですね。ところが途上国に行くと国連が決めた、じゃあ12月3日だから何かやろう、という事で障害者団体が毎年違うテーマにそって何かやらなきゃいけないと動き出し、同時に政府も動いて、障害者団体と一緒に行事をすることも多いです。そういう意味での、国内的な政策が脆弱だからこそ、できることもあるんです。それ以外には、やはり政府を初めとする国民の強いコミットメントが無ければできない事で、途上国政府は他にもいろいろ問題を抱えていて、多分他のスピーカーの方もそのお話をなさると思うんですけれども、その意味から言うと障害分野でのグッドプラクティスというのは、多分、期待されていられるようなお答えをするのは難しいかなと思っています。

勝間 どうもありがとうございました。2つ目の質問とですね、3つ目の質問は非常に近いものかと思っています。社会的なバリア、意識の問題という事なんです。これについてはバリアの分類をしていただいた土橋さんから全体の話をしていただいた後にですね、4人のご報告者にそれぞれの国における社会的なバリア、意識の問題はどういう状況にあるのか、そしてそれを解決していく、意識を向上していく為には、どういう取り組みが必要かという事について、少しご意見を伺いたと思います。それではまず土橋さんから、日本は物理的なバリアを取り除くのには非常に上手くやっているんですけれども、というところあたりから、お話いただければと思います。

土橋 土橋でございます。貴重なご質問ありがとうございました。社会的なバリアといのは

私が先ほど4つのバリアがあると申しあげましたが、多分、その4つのバリアの中では1番難しいところが社会的バリアなのではと思っております。実は日本が物理的なバリアの取り組みに非常に成功していると申し上げたのですが、そういった取り組みを行って成功したと言っている交通バリアフリーの取り組みを行っている研究者の人達のグループがあります。その研究者の人達が今、何を言っているかという、日本は物理的なバリアはある程度確立してきましたが、これからは心のバリアフリーをやっていかなければいけないんだ、ということです。つまり社会のバリアフリーの取り組みを進めて行かなければいけない、というような段階にあるのかと思います。ですので、そういった意味では、まだまだこれからどんどん取り組んでいかなければいけないところなのかな、と思います。

逆に途上国のほうでは社会的なバリアが実は、偏見無く上手くやっているところもあるのかもしれないな、と思っています。自然に障害者の人達がいたら、みんなで普通に助けていく。例えば CBR という取り組みがあります。Community Based Rehabilitation、村の中で障害者の人達を村の社会の中で普通にコミュニティーの中で障害者の人達を支援していくというサポート方法をやっています。施設でのリハビリテーションではなくて、コミュニティーの中でそういった障害者の人達と一緒に生活していくんだというアプローチです。そういったようなところはむしろ途上国の方が偏見なく、そういった取り組みをしていく事が可能なのかな、と思います。今、世界の中でも様々な取り組みがなされています。その国にあわせていろいろなアプローチの方法があるのかな、という風に思っております。

勝間

はい。どうもありがとうございます。今出てきました CBR、つまり Community-Based Rehabilitation についてはですね、中西さんが書かれた「国際保健の基礎知識」というものが、入りのレセプションのところにありますので、これもご参照いただければと思います。

それでは、今の土橋さんの話では、いろいろ国によって意識の問題というのは違うというご指摘があったんですが、それを具体的に少し伺いたいと思います。

それではまず、こちらから私の近いところから。アフガニスタンでは、社会的なバリア、意識の問題は、今どういった状況にあるのか、そしてそれを改善していくにはどうしていけばいいのかという事について伺いたいと思います。それではアジズさん。お願いします。

アジズ

ありがとうございます。ご質問ありがとうございます。2つの例をお話したいと思います。1つは社会的な問題、もう1つは社会的側面に関する医療の問題です。

まずアフガニスタンは家族が伝統的に障害者を尊重しており、単純な作業でもやらせなかった、と申しました。もし、食べることができる、あるいは、服を着るという事

ができててもそれをさせない。

例えば、食べ物を口に運んであげるといような事をしていたわけです。これが1つバリアとして、私達の社会にあるものだと思います。時には支援が過剰になりすぎてしまうことがあるわけです。それほど支援は必要としないかもしれないのです、当事者は。でも社会はそれだけの支援をしてしまう。家族が支援をしてしまうわけです。ですから、これによって、社会のあり方によって障害者がより受け身になってしまう。そして何もしないで単に他人の支援を待っているという姿勢になってしまいます。

ですから社会や家族に対しての教えとしては、障害者に日々の活動はできるかぎりさせて下さい、と。そしてもしできないとすれば、どうしたらこれを支援できるのか、助けられるのか、その作業を自分ですることを、どうしたら助けられるのかという事を考えて下さい、という事です。当事者が自分で日常の事をしたり、歩いたりすることができるようなのは、良いことなのです。

それから医療に関しての意識ですが、障害者が適切なケアのシステムに紹介してもらうという事が重要です。通常は病院サイド、あるいは医療関係者が障害者に対し、どう対応していいのか分からないのです。

例えば骨折が治ったら自宅に戻ってもらう。でもさらにその後のリハビリテーションをどうするかという事を知らないという場合があります。ですからやはり医師あるいは医療関係者がどのようにして患者をケアしたらいいのか、そして適切なヘルスケアのセンターにその後フォローしてもらうということが重要です。

勝間 一人代表してまずケンボンさんから話しいただけますか。

ケンボン ご質問ありがとうございます。ラオスに関しては、障害者のバリアフリーというのは、非常に難しいわけでありましたが、ハンディキャップ・インターナショナル・ベルギーでは政府に対して学校へのアクセスビリティというものを提供してもらうようお願いしております。ただこれは、非常に難しいわけです。とにかくそれを推進しようとはしていますがまだ政府からの回答は返ってきていません。ただ改善はなされつつあります。でもまだまだ改善の途上ということです。ありがとうございました。

勝間 それでは、ミャンマーからいらっしゃったミャッモーさん。いかがでしょうか。

ミャッモー 現在ミャンマーにおきましては、まず障害者自身それぞれが生活のための基盤を整える、すなわち自立して生活することができるという点に非常に強く関心を持っている状況です。そして障害者法というものが出来上がりつつありますが、それも健常者が障害者に対して支援を行うべきであるという点が強調されており、必ずしも障害者自身が自立をして、そして自らの力で活動していくべきだ、行うべきだという点が弱い

ような感じを持っております。ですからミャンマーにおきましては、まずそれぞれの障害者が自立して生活できるという状況というものが出来上がってくればそのような観点にも少しずつ興味を抱くようになるのではないかと考えています。

勝間 どうもありがとうございました。それでは、もう一度会場の皆さんからご質問を受け付けたいと思います。ご質問のある方、挙手していただけますか。

はい、お一人。他にいらっしゃいますか。それでは、青い服の男性の方。よろしくお願いします。

質問 4 UNCHR に所属するものです。1つ質問があって、前の質問と少し重なるところがあるので恐縮なのですが、支援者、助ける人、助けられる人の間による壁というものがあると思うのです。例えばそれは、理解、その人の身になって考えることができないとか。ちょっと自分の機関の話になって恐縮なのですが、難民の話でも、日本にはあまり難民の方とかがいらっしゃらないから、なかなか日本の人は共感できるのに難民って言うのは、どういう立場なのかが理解出来ないがためになかなか支援がいかないということがあると思います。障害者に対してもやはり同様のことが言えると思うのですが、今日いらっしゃった皆様がそれぞれの機関あるいは国でどのような、つまりどのようにしたら同じ自分たちの国の人たちが同じ、障害者の人たちに対して理解をするための、そういう教育とか啓蒙活動みたいなものをされているのか、何か具体例かなにかがあれば教えていただきたいと思います。

勝間 はいどうもありがとうございます。他にご質問あるいはコメントはあるでしょうか。はい白い服の方。

質問 5 日本社会事業大学の者です。本日は、ありがとうございます。障害をもった方々が当事者として支援の方法とかを考える一番の意義というものは何なのかということをお教えいただけたらと思います。

勝間 はい。他にご質問コメント。前の方にいらっしゃる方、女性の方。

質問 6 今日は、皆さん大変興味深いお話ありがとうございました。早稲田大学国際教養学部4年です。1つ質問なのですが、お話の中で障害者といっても種類があると思うのですけれども。身体障害者の方でしたら車イスとかそういった器具とかで支援を行うことができると思うのですけれども、例えば精神障害者といったメンタルな部分での障害を持つ人に対する支援を行っているのでしたら紹介していただければと思います。

勝間 はい。ありがとうございます。他にご質問はありますか。はい。

質問 7 JICA のプロジェクトの関係でこれまでフィジーとラオスの方にしばらくおりました。

今日は、質問が1点あるのですけれども。先ほど土橋さんがおっしゃった、社会的なバイアスという点について言いますと、例えば日本の障害者に対する偏見とかがですねもしかすると他の国々比べたらより深刻なのではないかなというふうに思うところがあるのです。例えばラオスですと逆に障害者の方々は、村の中で普通に受け入れられていますし、そういった意味では日本の方がある意味シリアスな部分があると思いますので、日本と比較した場合の、こういう問題を見たときのより厳しい点、もしくは楽観的に見られる点等ありましたら、教えていただきたいと思います。ありがとうございました。

勝間

はい、ありがとうございました。時間がだいぶ迫ってきていまして、質問是非ともしたいという方、ぜひ手を挙げていただけますか。もしなければここで質問は、打ち切りますが。

では、柳瀬さん。よろしくお願いします。

柳瀬

今日は貴重な時間ありがとうございます。「難民を助ける会」の理事長の柳瀬でございます。私は、伺っておりまして、随分いろいろ難しいと思ったのは、まず障害者の方たちの、途上国における障害者の方たちの教育の問題がすごく大きいということです。「難民を助ける会」では、カンボジアで障害者支援をして直面した問題ですが、何かメモをすることさえも彼らはできませんでした。まずABCから教えて、そして朝早くから識字教育を行って、それから実際に職業訓練を始めました。それからミャンマーにおいても同じように読み書きソロバンからはじめ道德を支援内容に入れております。そういった教育の土台がだいぶ違うからいきなり法律のこと。それは、今日来ていただいている方たちは、障害者を代表するような方たちで教育も受けておられます。障害も軽い方ですし、健常者もおられます。そういった観点でかなり実際のものとの隔たりがあるように思いました。今日のお話を聞いておりましたら。それからもう1つ。健常者でさえ就職が出来ない、失業率が大変高い国々です。その上障害を持っているということがもっともっと自立を妨げているというのが現実だと思います。それぞれの国の経済開発等をもっと考えないとなかなか自立できないということもあります。それから3つ目が小乗仏教の教えということもバリアになっていることの1つだと思います。ところがこれは、昨日もたまたまミャンマーの研究会があつてお話を伺っていたんですが、1つは考え方の中に諦観、諦めというものがあつてもう過去のことに関しては、諦観をもつ諦めをもつという人々である。つまり障害をもって生まれたらそれは仕方ない、サイクロンの大きな被害を受けてもそれは仕方ないと、それでどんどんどんどん前に進もうとしている人々であるというようなお話が一言ありました。いろいろ考えてそういうこともちょっと私たちは、考えなくてはならない、考えなくてはならないというよりもどこか片隅においてもいいのかなと。一方で私もミャモーさんがいい例だと思うのですけれども、実際に職業訓練で自立すると、職を身につけてそれが生活の手段になる。そうするとミャモーさんは、どうかわかりませんが、それまで家族の中でいわばちょっとお荷物になっていたような方

が、収入があるとすごく大事にしてもらえるようになる。そういう実際の場面をたびたび見ております。だからこそ仕事を身につけてほしいという思いで、そんな思いで「難民を助ける会」の活動を続けてきております。以上です。

勝間 はい。コメントありがとうございました。

それでは、ここで質問とコメントは打ち切らせていただいて、パネリストの皆さんにお話を伺いたいと思います。

まずですね、海外から来ていただきましたゲストの方にご質問なのですが、まずシリソンスック・スンドラさんに伺いたいのですが。体の障害と精神の障害で社会における位置づけも随分違うのではないかとこのご指摘があったのですけれども、この点についてはどういう風に見ていらっしゃるのでしょうか。

シリソンスック ご質問ありがとうございます。ご質問に答えるよう努力します。まず、重度の障害を持った方々、身体障害に関しても精神障害に関してもどう対応しているのかということですが。答えは、非常に難しいということになります。身体障害があるというだけでも大変なわけですが、精神障害もあるとさらに困難が増すわけであります。しかしながら、私どものセンターでは何をしているかといいますと、まずどういうニーズがあるのかを明らかにしようとしています。我々の活動その身体能力の向上、精神能力の向上ということ分けてやっております。先ほど、理学療法をやっていることを話しました。また精神的な能力向上のために音楽療法も活用しているという話もしました。その精神的な能力に関しても教育を行っています。デイケアの方はこの身体的能力向上のための理学療法をやっているわけです。様々な活動を行っていますが子どもたちに自立できるように教育をしています。例えば私どものセンターでは、魚を使った教育を行っております。観賞魚ですけれども、池に魚を飼っているわけですね、子どもたちはそれに餌をやるわけです。魚が一ヶ月半くらいたつて大きくなりますとその魚を売るわけです。そのお金を子どもたちに渡します。その収益を子どもたちに渡すわけです。そうすることによって子どもたちは、障害を持っているけれども自分で価値を生み出すことが出来るのだと感ずることが出来ます。そういった活動を通じて子どもたちは、その精神の安定を得ることが出来ます。そういった精神的な側面での成長が図れます。

勝間 では、同じ質問をアジズさんとケンポンさんとマッモーさんに伺いたいと思います。先ほどから教育の役割ということが指摘されているのですが、障害者が自立していくため、また社会的なバリアをなくしていくために、教育の役割について少しご意見を伺いたいのですが。その教育をどういう風に進めていけばよいか、それぞれの国についてお考えを教えてください。それでは、まずアジズさんから。

アジズ ありがとうございます。1つ教育について、また教育の障害者に対しての役割につい

て1つ指摘したいことがあります。アフガニスタンでは、障害児を学校に統合するということを試みています。これは、今まではなかったことです。以前は、障害児は学習が出来ない、学校に行くことはできない、学校と一緒に参加することはできないと言われていました。ですから障害を抱えた子どもが学校に参加し適切な教育を受けるということです。これによってこの障害者の将来にも大きなより良い変化をもたらします。ですからこれが1つの例だと思います。ただ教育は、また別の例もあります。例えば、ミャットモーさんがおっしゃったような例です。スキルについての教育を受けるということです。技能教育を受けるということです。そういった教育を障害者に対して施したときには、自分に生計を立てて生活していくだけの収入を得ることが出来るわけです。これによって障害者の生活が変わると思います。

勝間 お願いします。

ケンポン ありがとうございます。ラオスでは、障害者の親の多くは、障害者を家の外に出しません。ですから教育については、教育レベルが非常に低いと言えます。私がハンディキャップインターナショナルで働き始めたとき職業訓練だけを提供するプログラムがありました。まず人との関係、それからグループとの関係を教えるわけですが非常に大きな分野について教えるのではなく、選択して一つの狭い分野について教育をします。で、それをプログラムとして行いますと障害者がその訓練を受けにくる、そして訓練が終わると就職が出来る。あるいは状況によっては、その自分の出身の村に戻ってさらに技能を磨くことになります。

勝間 お願いします。

ミャットモー まず教育の役割、障害者の自立における教育の役割ということについて質問をしていただいて大変感謝いたします。私が思いますには、まず一人一人の障害者自身からまず始める、そして活動していくことが大事であると思います。まず一人ずつ、一人ずつが自分は出来るということ、それを示す必要がある。そしてできればその後小さいグループ、小さいグループというのをまず作る。そしてその小さいグループごとでそれぞれ能力がある、実際に活動を遂行できるという面を多くの人々に示すということ。その多くの人々に対し障害者自身が自分は自分の能力で自立して活動していくことが出来るということを示す。そうすることによって初めて一般の人々は、障害者を受け入れるという風に思います。これが私は、まさに教育をする、教育を与えるということと同じ意味を持つという風に考えています。私自身も家族があり、家族の生計のために働いているということがありますけれども、それだけに留まらず、私が居住している地区におきまして栄養教育、栄養を与えることの大切さ、それを教育している。そのことを皆に話をして教えています。また今般のサイクロンの被害を受けた被害者の人たちに対して、障害者はもちろん健常者に対してもですけれども、日本の多くの皆様方からの寄付金で支援物資というものを購入し、それを実際に今般のサイクロン被害を受けた人々のもとに直接わたるように配布するという、これも立派な教育

の一環ではないかと考えています。現在残念ながらまだミャンマーには、障害者法というのが公のものになっていません。しかしこれが国の承認を得て実際に法律そして公的なものになるならば、より障害者に対する教育というものが可能になる、できるようになると思いますし、そうすればより障害者の自立、障害者自身が自立して活動していくということに対して資するところが大きいという風に考えています。

勝間

どうもありがとうございます。それでは、もう時間も随分ないのですけれども、土橋さんと中西さんに一言ずつお話を伺いたいと思うのですが。大きなグローバルな障害者の権利条約というお話から、当事者の皆さんの現場での声へと、この間のギャップをどうやって埋めていけばいいのか。日本としては、こういった役割を果たしていくべきなのか。ちょっと難しい質問なのですがすけれども、土橋さん、よろしくお願い致します。

土橋

はい、これは、障害者特有というよりも日本の国際協力の1つすごく良いなっている風に世の中で言われていることと関係してくるとおもいます。例えば批判するわけではないのですが、欧米の支援というのは、どちらかというと「上から下」というか、自分たちのポリシーを持ち込んで、その途上国の人たちにあてはめようとするところがあるんじゃないかと思います。これは批判ではありません。それで、日本の支援と一緒にやっていくというところ強みがあるのではないかとおもいます。例えば私は青年海外協力隊でフィジーという国に行きました。この協力隊の活動を考えた場合では、そういったところで現地の人たちと非常に仲良く日本は接しているんじゃないか、と思います。そういったように接近して協力していくことが出来る可能性があるのかなと思います。先ほど国際協力のお話がちらっと出たかと思っています。また、障害者の人たちがプロジェクトを考える意義みたいなことも確か質問に出たのかと思います。それらに関する考えとも重なりますけれども、やっぱり障害者は、自分達のことは自分達のことでよく分かっている。だから先ほど冒頭の講演の中でも中西さんがおっしゃっていた、“nothing about us without us”「私たちなしに私たちのことを決めないで」という視点が非常に大事なのかな、と思います。そういうことは、いろいろと日本のやっているいろんな国際協力や開発援助の中でも活かされていくことなんじゃないのかなって思っています。また、国際協力と言うのは、片道通行、日本から一方的に支援をするということではなくて、我々が、(我々日本人なので我々と言いますが)、こういった途上国の人たちからいろいろ学ぶことも非常に多いんじゃないのかな、と思います。先ほど社会的なバリアのお話で出ましたが、そういったところで実は、途上国の方がバリアが低い部分も多くあると思うんですね。そう言ったところから我々が学ぶことが出来ると思います。つまりお互いに学びあえる 2way があって国際協力というものが成り立つのかなと思います。そういったことを考えながら今後も国際協力の仕事にまい進したいと思っています。

勝間

はい。では中西さんお願いします。

中西

現場の声とお話があったんですけれども、現場を見てみたときに、今までの支援というのは、例えば職業訓練を初めとして障害の軽い人に対して行われていたものでした。例えばミャット・モーさんのような軽度の障害者の人が職業訓練を受けると、大半の場合はお金が得られることになるからじゃあ自分の障害のことは忘れて、障害者じゃないような顔をして一般の社会の中で過ごすことができました。彼のような例って言うのは、やっぱり凄く特別ないい例だと思うんですね。職業訓練をいくら続けていてもこの世の中変わらない、そこでさっきお話したのが自立生活運動が必要となります。これは、重度の障害者を中心としています。重度の障害者が地域で生きられるというのが証明されたら社会が変わります。例えばアジアの国には日本の自立生活センターが行って支援しているのですけれども、それらの国々で一人をロールモデルとしてその人が生きられる社会というのが証明できたら、つまり誰でも生きられることになる、それによって社会は変わっていくんですね。また一人を助けられたということは、他の重度障害者も助けられることで、その例を通して政府に対してもっと支援を要求することも、それから他の障害者のためにもっと働いてもらうことも可能になってくる。そのように考え方を変えない限りいつまでたっても、いくら支援しても障害者というのは弱い立場で、もしくは重度障害者人たちというのは、見捨てられたまま支援の網になかなか掛からなくて、軽度の人たちは職業訓練を受けてまたは教育を受けて普通の社会の中に行ってしまうって障害であるという問題を叫ぶという人がいつもほんとに一握りの人しかいなくなるというような現状があるんじゃないかと思います。そのためさっき自立生活運動というのが今後進むべき1つの方向というふうにお話ししました。これは権利条約の中にもきちんと書かれています。日本ではアメリカで生まれたこの運動を緻密に精査して、そしてその技法をマニュアル化しました。それが今受け入れられてアジアで発展しています。この方法というのがアジアの多く国に伝わって、日本でいま重度障害の人が外に出て生活できるように、他の国でもそういう時が訪れてこそ私たちの支援が一番うまくいっていると言えるんじゃないかと思います。

勝間

どうもありがとうございます。時間がなくなってしまいました。本当に申し訳ございません。まだまだ語りつくせないところがあるのですが、このあとはですね「難民を助ける会」の活動に参加するとか、「障害分野 NGO 連絡会」のメーリングリストに入るとかですね、あるいは世界銀行で行われている定期的な勉強会に参加するなど、いろいろな形で皆さんこの議論を続けていけるのではないかなと思います。

で私は、総括しようと思ったのですが、今の中西さんのお話で総括ということにさせていただいて、ここで終わらせていただきたいのですが、いくつかアナウンスメントがあります。

このシンポジウムは、アクセンチュア株式会社のご協力によって実現したものです。感謝申し上げたいと思います。また手話通訳としてくださっている中野佐世子さんと豊田直子さんに感謝したいと思います。また英日同時通訳を本当に長い間やっていたいて本当に申し訳ないのですが、岩本智子さんと寺崎弘孝さんに感謝させていただ

きたいと思います。またパネリストの皆様、そして基調講演そしてコメンテーターの土橋さん本当にありがとうございます。そして、この遅くまで9時近くまでここに残っていただいている参加者の皆様本当に感謝したいと思います。それでは、拍手でこの会を閉めたいと思います。どうもありがとうございました。

本日はご来場いただき誠にありがとうございました。お手元のレシーバーは、出口にてスタッフが回収しておりますので必ずご返却ください。またアンケートへのご記入もお願い致します。ご記入後は、受付ならびに近くにおりますスタッフにお渡しください。

本日はご来場いただき誠にありがとうございました。今後とも「難民を助ける会を」どうぞよろしくお願い致します。

◆ 基調講演者・報告者略歴 ◆

◆ 中西 由起子

国際障害者年日本推進協会(現日本障害者協会)での勤務が障害と開発に関わるきっかけとなる。その後、DPI(障害者インターナショナル)アジア太平洋ブロック事務所、ESCAP(国連アジア太平洋経済社会委員会)を経て、1990年にADI(アジア・ディサビリティ・インスティテュート)を設立し現在に至る。アジア太平洋の障害当事者の自助活動や自立生活運動の他に、アフリカの障害問題にかかわっている。

◆ 土橋喜人

国際基督教大学 1991 年卒。三和銀行での 5 年の勤務を経て青年海外協力隊の村落開発普及員として 3 年間をフィジーで過ごす。JETRO アジア経済研究所開発スクール、マンチェスター大学 IDPM で修士課程を修了後、2001 年に国際協力銀行(JBIC)入行。現在は、円借款事業の技術的・専門的な側面支援を行う開発セクター部に所属し、同部の社会開発班にて円借款事業への社会開発の視点からの業務支援を担当。

◆ アジズ・アフマッド・アデル

アフガニスタン・カブール、36 歳。カブールの理学療法専門学校修了。理学療法士として公立病院に勤務の後、理学療法専門学校で、教員・治療指導員として勤務開始。現在は同校プロジェクトマネージャー。難民を助ける会が運営するタカール州の理学療法クリニックでは、理学療法士のほぼ全員が同氏の下で理学療法を学んだ。技術面や、人材育成の面などから、当会の理学療法事業を支援している。

◆ ミヤッモー

ミャンマー(ビルマ)・ヤンゴン、42 歳。2000 年に地雷の被害にあい、右腿から下を失った。2003 年に 3 か月、難民を助ける会の美容理容職業訓練校で学ぶ。在学中は、国際障害者デーのイベントのカットコンテストで優勝するなど、優秀な成績を修めていた。卒業後は同訓練校アシスタント講師、講師を経て、現在はチーフ講師として動向全体を統括している。

◆ ケンポン トンシタウォン

ラオス・ビエンチャン、32 歳。ポリオの後遺症で左足に障害をもつ。1999 年より国際 NGO ハンディキャップ・インターナショナルの職員として勤務を開始し、現在は同 NGO の職業訓練担当職員。2006 年には、国際協力機構(JICA)の障害者リーダーシップ研修のために来日している。難民を助ける会のラオス事務所スタッフが参加する、車椅子バスケットボールにもかかわっている。

◆ ソンスック スンダラ

ラオス・ビエンチャン、34 歳。ラオス国立経営学スクール卒業。卒業後は、民間企業、フランス語通訳、国際 NGO、在ラオスフランス大使館に勤務。2007 年 7 月からは新潟県にある国際大学の MBA コースに在学。息子の脳性麻痺をきっかけに障害者支援に関心をもつ。2007 年、脳性麻痺児のための施設を設立。難民を助ける会は 2008 年より同施設を支援している。

◆ 勝間 靖

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授、グローバル・ヘルス研究所所長。日本国際連合学会事務局長・理事、日本平和学会編集委員長・理事、国際開発学会広報委員長・常任理事。ホンジュラスでのボランティア活動とカリフォルニア大学留学を経て、国際基督教大学教養学部と大阪大学法学部を卒業後、同大学院で法学修士。海外コンサルティング企業協会に勤務後、ウィスコンシン大学マディソン校で Ph.D 取得。その後、国連児童基金のメキシコ事務所・アフガニスタン事務所などを経て、現職。

（所属等は講演時のもの。本稿に記されている見解、判断は発表者のものであり、所属組織の公式見解ではない）。

編集担当者一覧

■編集

勝間 靖 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

上久保 誠人 早稲田大学 G-COE GIARI 特別研究員

■記録担当

奥山 桂子 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修士課程

棚橋 忠司 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科修士課程

■デザイン・校正担当

宮野 祥子 早稲田大学 G-COE GIARI 事務局

途上国における障害者の人権
～障害を持つ人びとの自立支援を目指して～
Human Rights of Persons with Disabilities in Developing Countries
“Towards Self-support of Persons with Disabilities”

2009 年 1 月 31 日発行

編集者 勝間靖・上久保誠人

発行者 早稲田大学グローバル COE プログラム「アジア地域統合のための世界的人材育成拠点」
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-21-1 早大西早稲田ビル 5F 507

印刷所 株式会社 早稲田総研インターナショナル
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-6-1 14 号館 1F

ISBN 978-4-904618-02-8

本報告書の全部または一部を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

